

## オルロフの軛

### 1

ごうごうと風が吹いている。

否。体全体の触覚情報が、動いているのは自分のほうだと告げている。しかし体は動かない。動かせない。そもそも体がどこか剛体と接している様子がない。つまり加速度は外力から与えられている。

再び否。もはや等速運動に入っている。変位の時間一次微分に比例してこの体の受けている空気抵抗が、重力という慣れ親しんだ加速度の作用と完全なる均衡に達している。つまりこれは。

——落ちている。それも相当の高さから。

始まりがあれば終わりがある。無限に落ち続けるということは、おそらくあるまい。

そのとき初めて視覚を意識した。正面に見えるものは、ぼんやりとした色彩の四角形や曲線の集まりがあった。都市だ。遠近感からして、まだかなり高度がある。まるで飛行機から放り出されたかのようなのだ。

落下傘はないのか。よくわからない。体が殆ど動かない。あったとしても操作できそうにない。

——どうしてしまったのだろうか？

記憶が混沌としている。いったい、いつ、どこから、なぜ、どのようにして落下するはめになったのか。生き残るための術を考える余地もない。誰か、助けようという者はいないのか。誰でもいい。猶予はあまりない。誰かいないのか。

叫ぼうとしたが、声がかうまく出せなかった。口に飛び込んでくる大量の空気の塊のせいかもしれない。無味乾燥。

これで終わりなのかかもしれない。まだ何もし得ていないというのに。

そのとき、それは現れた。耳障りな金切り音とともに。燦然と輝く白銀の肢体が視界を横切ったかと思うと、やがて体がなにかに包み込まれた。機械の巨大な手だ。

適度な弾力がある。思ったとおりだった。汎用的に物体を把持するマニピュレータのエンドエフェクタとして、破壊を避けるためには接触応力を下げたいし、取りこぼしを避けるためには摩擦を増大させたい。するところになっているのは当然の帰結だ。亜細亜連邦も啓示軍も関係ない。

そうだ、自分は<sup>アジア</sup>亜細亜連邦軍将校だと、男は立場を思い出した。そして自分を<sup>つか</sup>掴んでゆっくりと減速をかけているこの機兵は、紛うことなき敵のフラッグシップ機。ノイエトーター。しかし、やはり。

——美しい。

人と機兵の視線が対向する。風防越しに赤い輝きを放つその単眼は、拾い物をしげしげと眺め、

微笑んだようだった。

## 2

「あなたは運がいい。私はエトガル・ローゼン少尉。あなたの保護監督責任者を務めることになった者です」

男が無事地上に軟着陸して以来、自己紹介を受けたのはこれが初めてだった。保安と健康の両観点で実施されたい身体検査の間、会話といえばガスマスクやハーフミラー越しの質疑応答のみで、それがようやく済んでこの個室まで案内してきたのも、寡黙な兵士たちだった。きっと命令に忠実なのだろう。しかし、この青年は命令をする側の人間のように、男は分析した。

ベッドに腰掛けたまま男がじろじろと視線ばかり向けていると、エトガルは予め用意していたように言葉を続ける。

「英語は通じていますね？ 念のため、自己紹介だけここで繰り返して頂きたい」

「私は、<sup>ワンガイウエイ</sup>汪凱威。亜細亜連邦軍大尉だ」

あわせて識別番号までは、捕虜の義務として答えた。そして尋ねる。

「君は今、保護観察責任者と言ったな？ 捕虜収容所の長というわけではない。したがって敬礼は要さないものと判断する」

「構いませんよ」

エトガルが涼しい顔で答えたのを確認して、汪はゆっくりと立ち上がった。そして恭しく敬礼する。

「——私は何か聞き違えたのだろうか」

「否。これは私の気持ちの表明だ。助けてくれて感謝する。——乗っていたのは、おそらく君ではないと思うが」

「ご想像にお任せします。ま、座って下さい。いろいろお話したいことがある」

「それは助かる」汪は無遠慮にベッドへ体重を預けた。「身体検査の結果は聞いているかね？ あんな体験のあとのせいか、体がこわばってよく動かせんのだ。きっと特記事項として載っているに違いないのだが。なにせ、私は二度言ったのだ」

クリップボードに綴じられた紙を数枚めくって、エトガルは頷く。

「事実のようですね。——あんな体験、とは？」

「落下傘を忘れて飛び降りたのはうっかりしていた。そのことだよ」

「飛び降りた？ 自ら？」

「突き落とされたと思うのか？ これは古典的ミステリではないのだ。私は大使としてここへ来た」

エトガルの顔色が変わるのを、汪凱威は内心楽しく捉えていた。

「立ち話もなんだから、君も座るといい。大丈夫、護衛のぶんも、そこにスツールがあるぞ。ここはいい部屋だな」

「私はひとりでここへ来ていますが、ご指摘のようにいい部屋ですので、監視カメラは設置してあ

ります。妙な行動は身のためにならないことを宣告しておきます。しかし、監視についているのは信用の置ける者たちです。記録も取っていません。どうぞ、話を続けて下さい。私が必要と判断すれば、然るべきところへ案内し、そこで同じ話をして頂きます」

「座らないのかね。まあ、いいが。——単刀直入に言おう。私はこのモスクワに降伏勧告を伝えに来た」

少しの沈黙があった。エトガルは落ち着きを取り戻してきたようだった。

「ここがモスクワであると、どこで判断しましたか？」

「目的地を知らないはずがないだろう。私もそこまでうっかりさんではない」

「落下傘を忘れるほうが余程だと思いますがね。——まあ、いいでしょう。調査すればわかることです」

「それは、ノイエーターの撮影記録ということか？」

「答える義務はありません。道義もね。それよりも本題に入りましょう」

「あいにく、貴官では話にならん。司令官に会わせてほしい」

「内容を聞いてから、こちらでその必要を判断します」

エトガルが踵を小さく鳴らした。近くに控えている者たちに合図を送った、とも見える。荒事は好きではない。汪は作戦を修正する。

「仕方ないな。ではさわりだけ……。ずばりだが、<sup>オフエンバーレナ</sup>啓示軍はもはや死に体だ。我が軍のダーダネルス作戦以来、このユーラシアの戦線を全面的に押し返され、北米への出兵も失敗した。このモスクワを包囲されたことからしても、兵站が回らなくなっているとわかる。おとなしくモスクワから撤兵するがいい。火蓋を切って確かめるまでもなく、君たちの負けなのだ。無為に人命と資源とを浪費するのではなく、未来に向けた里程に思いを馳せるべき頃合いだ。我々も、同胞の首都をこれ以上の戦火に晒すのは避けたいと考えている。いや、モスクワばかりではない。亜細亜連邦の領土をすべて返上したうえならば、修好条約を結ぶ用意があるのだ」

そこで言葉を切り、相手の瞳を注視する。エトガルはふっと笑った。

「来るべき対米戦に備えて、というわけですか」

これを聞いて汪もまた内心ほくそ笑む。

「話が早い。我々は、世界征服というハンス・ライルスキーの前時代的なやり方は許容しないが、彼の目指すところには一定の理解があるつもりだ。確かに今という時代、強力なリーダーシップのもとに人類の結束が求められる。『八月の悪夢』。四半世紀前に起こったあの出来事を、真に理解するために。而、惨劇を再び迎えぬために」

「それならば、亜細亜連邦こそがハンス様の呼びかけに応えればよかったのです。ハンス様はもとより平和的に教化を進めるご予定であられた。それを黙殺し、報道の封殺によってファシズムの再来のように喧伝したのは、亜細亜連邦の悪意としか言えない」

「さて。それについて論ずるには、まず確かな情報……というよりも、一個一個の情報の断片を双方が開陳し、つぶさに検証する前処理を必要とするな。それは私の好むところだが、しかし、今はその時間が惜しい」

「そう急ぐことはないでしょう。ただちに降伏しなければ、このモスクワを<sup>かいじん</sup>灰燼に帰すとでも？」

「<sup>キムソンヤ</sup>金星也元帥はそのつもりだ。私を大使に立てたのは、今述べたような建設的な議論のできる勢力だよ。金元帥も彼らの意向をある程度尊重しようとしているが、あくまで、自身の描いた青写真から大きく逸脱しないことが条件だ。ずるずると交渉に手間取るようでは悪手となる。貴官はこのチャンスを、時間を、大切にすべきだ」

汪は、少し舌が回らなくなってきた、そこでベッドサイドに置かれていたコップの水を飲んだ。その間にエトガルは、懐から通信機を取り出すと、誰かと短いやりとりをした。おそらくドイツ語だったろう。内容はわからない。相手の声は女のような音だった。

エトガルはひとつ咳払いをして、クリップボードの中から抜き取った一枚のプラスチックカードを汪へと差し出した。

「あいにくですが、私達とは現状に対する認識が異なるようですね。ひとまず、このギャップを埋める措置を取ることにしましょう。そのうえで、なお降伏勧告を伝えたいというのであれば、然るべきところへご案内することを約束しましょう。よろしければ、ここにサインを。汪凱威大尉？」

「なんだねこれは」

「IDカードです。市内を動き回るにはこれがないと不便ですよ。ご心配なく、クレジット機能はありませんから」

「ふむ。そのようだ」

汪はさっそくペンを取り、漢字と英語でサインした。漢字のほうが少し汚くなったが、手の動きも鈍いようなので、今は書き直しても無駄だと思い諦めた。今は早く情報を集めたい。エトガルは存外に話せる相手という直感を得ていたが、彼だけでは駄目だった。謎はあまりにも深く大きいのだ。

自分はモスクワに時空転移した。それは間違いないようだ。しかし汪の記憶は欠落している。自分は日本の横浜上空に出現した大いなる存在、<sup>クンレン</sup>＜崑崙＞の山中にあったのではなかったか。あれは九天軍ではなく啓示軍の支配下にあったのか。それで啓示軍占領下のモスクワに来てしまったのか。

確かめたい。汪は強くそう感じていた。それがおそらく、自身の空白のみならず、この世界が四半世紀も抱えてきた疑念、そして現在この世界を動かしている者たちの正体を解き明かす、よすがとなるであろうから。

### 3

<sup>ワン</sup>汪がいたのは元来ホテルとして使われた建物のようだった。外に出る過程でそれに気づいた。今は<sup>オフエンバーレナ</sup>啓示軍の前線司令部として使われているらしく、多数の軍服姿とすれ違ったが、汪を気に留めるものは少ない。それもそのはず、服が同じでも、着ている人間は老若男女、人種、千差万別だったからだ。少数派ながら、啓示軍に併呑された欧州各国家軍の制服も混じっている。それらに比べれば、汪が身体検査に際して着替えさせられた作業着など、地味なものだった。

敵陣の只中にある、という緊張は、あまり湧いてこない。むしろ汪が興味深く感じることは、彼らの士気が一様に高いことだ。

モスクワが亜細亜連邦軍に包囲されていると、エトガルには言ってみたが、あれは憶測に過ぎない。エトガルは特に奇異に受け取ったようには見受けられなかったので、しめしめ凶星かと、己の役者ぶりに陶醉していたが、実際はどうだろうか。汪が彼らの一挙手一投足、そして眼差しから感じるあの闘志は、自暴自棄の勢いとは全く異なる。彼らは将来の明るい展望を描いている。

「お待たせ！」

ホテルを出てからも通りを行き交う市民らをつぶさに観察していた汪は、間近でした声に振り向いた。さっきまで汪の隣でぼうっとしていたエトガルの、肩に飛びついているのは、銀色のフリルの塊。

「わわわわ」

よろける体をなんとか支え、奇襲してきた何者かを引き剥がしたエトガルは、すぐに破顔した。

「こら、フィー。来るなんて聞いてないぞ」

派手な女だった。まだあどけなさの残る顔つきながら、燃え盛る炎のように鮮やかな髪は、ウィッグなのか、およそ人類の毛とは思えない輝きを呈している。

懇ろな仲らしいが、その先は邪推というものかと汪が逡巡していると、さらにあとから近づいてくる者があった。こちらは二人で、軍服姿。女のほうはエトガルと同じデザインだが、男のほうは少し異なる。しかしそれ以上のことは、情報部所属でない汪にはわからない。服を着ている中身のほうに着目すれば、ともに若い<sup>たしな</sup>が、大人ではあるということがわかる。エトガルと同年代、二十代半ばといったところ。そのエトガルに<sup>たしな</sup>奪められて舌を出しているフリルの塊は、このうちの誰かの妹か。

「揃ったようね」

追いついたほうの女が言った。整えられた髪と凛々しい顔つきから想像したのとは裏腹に、優しい声だった。いい女だと汪は思った。

「はじめまして。私はウルゼル。エトガルの補佐をやっています。こちらは護衛のカスパル。——フィー、自己紹介した？」

それまで汪を完全に無視していたフリルの塊は、それが電柱や信号機でなかったことに初めて気づいたとでも言わんばかりに目を丸くして、汪を見上げた。

「あら、ごめんなさい。ボクはフィー。——あれあれ、どこかで会っているかな？」

ご丁寧にスカートの裾を広げてお辞儀したフィーは、そのポーズのまま、思案顔で一時停止する。燃え盛る髪がちりちりと揺れ、<sup>とき</sup>刻が止まってはないことを告げている。

「やっぱり何も聞いてなかったな」カスパルという男がにやにや笑う。「エトガルが街を散歩するとしか思っていないんだぞ、こいつ」

「そうなのか、フィー。この人は僕が保護観察責任者を務める亜細亜連邦の大使、汪大尉だ。これから街の様子を見てもらうんだよ。交渉の大前提として、知ってもらう必要があると僕が判断した」

べらべらとしゃべるエトガルに、汪は顔をしかめた。

「少尉。彼女も軍人なのかね。あまり私のことを言いふらしてもらっては困る。これでも密使として来たのだから」

誰かが噴き出した。しかし、ふりかえると皆、涼しい顔をしている。

「説明不足でしたね。フィーは啓示軍の士気高揚を努めとする慰問部隊の一員なのです。各地の部隊の実情を見て回るわけですから、凡庸な幹部などよりよほど、我らが啓示軍の全容を把握していると言っていていいでしょう。亜細亜連邦軍の組織からは、想像しにくいことかもしれませんが」

「ふむ、一理あるようだ」

どうにもやりにくくなってきた。汪は少しおとなしくして、促されるままにモスクワの市街を歩いていく。アルバート通り。昔から歩行者天国で賑わっている場所だ。あいかわらず人通りは多かった。もちろん、エトガルが知っているのはハンス・ライルスキーがドイツで頭角を表す前の前のモスクワであり、亜細亜連邦の支配体制に反抗するテロリストが時たま世間を騒がせることはあっても、誰もロシアの首都が何者かに<sup>さんだつ</sup>篡奪される事態などは想像していなかった。亜細亜連邦の枠内で行われる、ロシアと中国の陣取り合戦、そしてモスクワとオムスクの派閥争いなどが、新聞の恒常的な話題となっていた。それはそれで平和だったと汪は思い返すが、しかし、今こうして目にする市民たちの顔はどうか。さきほどホテルにいた啓示軍将兵たちと同じく、瞳に生きがいの光を讀えて闊歩しているではないか。

エトガルが露店の前で立ち止まり、フィーに卵入りのピロシキを振る舞う。ウルゼルが当然のように自分の分も要求する。こちらは魚だ。汪は通りすがりに眺めたことはあっても食したことはないの、一口くれと言いたくなかったが、己を戒める。

ここは敵の占領地だ。彼らにとってみれば、敵軍迫るなかであるが、この和やかな空気は一体どうしたことか。このなかでは最も緊張感を残しているカスパルとて、周囲に気を配りながらも、エトガルらのやりとりを横目で見てやはりにやにやしていた。

「君は、護衛ということだったが」汪はカスパルに初めて話しかける。「仮想敵は一体誰なのだね」

カスパルはわざとらしく首を傾げ、一拍おいてから、汪のほうを指差す。後ろを振り返ってみた汪だったが、そこには買い物袋を提げた通行人が行き交うのみ。狙撃手でも潜んでいるのかと思って目を凝らす、今ひとつ焦点が定まらず、すぐやめてしまった。風邪でも引いたかもしれない。

「あんた、マジでやってんの？」

カスパルが噴き出した。さっきのもこいつだと汪は確信した。

「よもや、私が害をなすとても考えているのかね！ 軍人と入っても私は文官寄りだ。荒事は好まないし、なにより、今は大使としての大命を帯びている。どうして君たちに危害を加えることがあるのか？ いや、ない！ 君、言うておくがね、常に理論的にものを考えたまえ」

泡を飛ばして憤慨する汪から顔を背け、カスパルはエトガルを見る。

「この大使さんは、エトガル坊やと馬が合いそうだな」

「坊やはよしてくれ、カスパル。僕はその呼び方が大嫌いだ」

「だから言ってるんだろ。——フィー、もう食べたか。そろそろエトガルを任務に戻してやれ。早く大使殿をお連れしないと、坊やは仕事が遅いと陰口を叩かれるぞ」

フィーはいつのまにかアツアツのチェブレクを頬張っていたが、折りたたむように飲み込んで、やはり熱すぎたのか目を白黒させたのち、一同を見回して尋ねた。

「どこに行くの？」

「それは私も聞きたい」汪は割って入る。「この街の平和ぶりはよくわかった。亜細亜連邦軍など恐るるに足らずと、見せつけたいわけだ。まさか私ひとりのためにエキストラを大勢雇ったわけでもあるまい。実際、怖くないというのは、そうなのだろう。しかし、モスクワの外の状況が変わるわけではない。いつまで状況を隠しているつもりだ」

エトガルらが困るに違いないと踏んで、汪はだんだんと声を高く張り上げていったが、誰一人、慌てだす様子がない。エトガルはむしろ、穏やかに微笑んだ。

「理解頂けたようですね。モスクワの市民にとって、脅威とは亜細亜連邦軍が帰ってくること。幸福とは、我々とともにあることなのです」

言われて汪はぞっとした。たしかに汪は、亜細亜連邦軍の包囲を敵として、啓示軍とモスクワ市民を一体のものとして今の発言をしていた。モスクワ都市圏の一千万規模の人口が啓示軍支配下の欧州各国からの移民でそっくり置き換わったはずもなく、ここは間違いなく、都市単位で亜細亜連邦の構成主体のひとつであり、中央議会の議員枠も複数持っている、モスクワなのだ。啓示軍にとってこそ敵地である。一年足らずの占領でそれが変わってしまったという事実を、汪は理論では否定しながら、しかし空気として呑み込んでしまったのだ。

——まさか、これほど早く、そして無自覚に進行するとは。

「おじさん、だいじょうぶ？」

フィーが心配そうに顔を覗き込んでくる。汪はその純真な瞳を直視できず、俯いている自分に気づいた。

「ああ、ありがとう」

汪が赤髪を撫でると、フィーは満足そうに口角を上げ、汪のもとを滑り出してくるくと踊りだす。エトガルらは慣れっこのようで、制止するでも、驚くでもなく、フィーが小鳥のようにあちこち飛び回るのを見ている。

やがてウルゼルが汪の隣に立って言った。

「フィーは誰かの悲しむ顔を見たくない。みんなに笑っていてほしい。そういう子なんです」

幼稚と笑うことはできた。しかし理知的な彼女の言ということで、汪はこれを素直に受け入れた。

「——モスクワの市民は、笑っているな」

「それも、あの子のおかげといっても過言ではない。人気者なんですよ」

「ふむ」

言われてみれば、多くの市民たちが足を止め、フィーの舞いを見つめている。汪などには一瞥もくれていない。今この場所で価値を持つのはフィーであり、自分ではないのだと、汪は悟った。わかってきた状況を踏まえると、大使のふりをして手柄を上げる作戦は考え直したほうが良さそうだった。

拍手喝采に包まれてフィーが誰にともなくお辞儀をすると、壁際に退いていたエトガルがそばに戻ってきた。

「さて。では行きましょうか。ベラルースキ駅に市長がいます。今からなら、ちょうど予定が空く頃でしょう」

「行き先がわかったのは結構だが、その市長というのは、何者だね」

「ドルグシキン市長。ご存じないですか？ 大使殿はモスクワに滞在経験があると、記録がありました」

「あの市長が、まだ残っているのか」汪は演技でなく嘆息した。「モスクワを売り、自らの安寧を得たか」

「それはどうでしょうね。市長は、モスクワ市民と、投降した亜細亜連邦軍の権利を確保するために政庁に残り、今日まで交渉を続けておいでです。尊敬に値する方と、私は考えています」

「それでこの安定した統治が成り立っているのか」

ひとまず納得したふりをして、エトガルの提言どおり移動を開始する。汪にとっては都合がよい。なるべく街のあちこちの様子を見ておきたかった。

ドルグシキンが市長として残っているとすると、市長に反抗を扇動させれば、友軍のモスクワ奪還が容易になるだろう。戦略軍が同じ情報を得ているとすれば、その策はすでに実行に移されている。なにしろ金星<sup>キムソンヤ</sup>はすでに号令をかけたのだ。北熊を先頭としてかなりの戦力がモスクワめがけて集結しつつあることは間違いない。汪はまったくのはったりを言ったわけではなく、状況から推定される仮説を利用したに過ぎない。

市内に味方のスパイがいる。それは去年のモスクワ陥落から潜伏し続けているレジスタンスかもしれないし、この雑踏のなか、スパイと一般市民とを見分ける自信は汪にはない。しかし、接触できれば状況は好転する。可能性に賭けたくもなる。汪が大使などでないことは早晩露見するだろうし、上空から落ちてきた経緯について追加調査が発生すれば、穏当な取り調べでは済まないことも予想される。早々に友軍にモスクワ奪還を開始してもらって、安全圏を取り戻し、その過程でささやかながら無視できない手柄を立てられると、なおよい。

表面上はフィーのおしゃべりに相槌<sup>あいづち</sup>を打ちつつ、しかし精神活動の過半を作戰検討に費やしながらか歩くうちに、地下鉄の駅に着いた。世界にその壮麗ぶりを誇るモスクワ地下鉄の内装は健在である。地上戦らしい地上戦も行わずに守備隊が投降した結果だろう。モスクワにとっては良かったのかもしれない。ただし、要衝を失った亜細亜連邦はその後大きく領地を奪われることになったので、もう少し抵抗してくれていればという無念さも否定できない。

壁の絵を鑑賞しながら歩くうちに、汪は全身を堅いものにぶつけて盛大に転倒した。

「おいおい、大丈夫か」

カスパルが差し出した腕を取り、汪は立ち上がろうとしたが、カスパルが支えきれずに再び床に転げる。

「おいおい、大丈夫か」

エトガルがカスパルを助け起こし、次にカスパルとウルゼルが二人がかりで汪の上体を起こした。大げさな、と汪は気分を害し、あとはひとりで立ち上がってみせたが、一苦勞あった。まだ体がうまく動かないようだ。

汪の行く手を遮ったのは、通路中央に立つ白い柱だった。高さ方向の中央がなだらかな曲線を描いてくびれており、上下の末端は直径二メートルほどある。砂時計によく似ている。横浜上空に出現した巨大物体の威光が脳裏に蘇るが、その輪郭はあいまいで、目の前にあるオブジェとの類似性

を検討するには情報不足である。それでも、何か繋がりがあると疑うには十分だった。

「見慣れないな、これは。監視装置か何かかね」

「そんなものは地下鉄に不要ですよ」エトガルが答える。「我々は市民の理解を得てここを拠点としているのです。誰かを見張る必要などありませんし、もちろん、亜連軍に対する畏や脅しに使う爆弾でもありません。これは我々の提供した最新式の BFG で、あなたがたの中央政府が民間用に許諾している仕様に比べると、まず数世代ぶんの差があると認識下さい。我々はこの BFG を、地下鉄を始めとするインフラや、簡易シェルターとなりうる箇所へ継続的に提供しています」

「何のためだね」

「世界を救うため！」

フィーがここぞとばかりにジャンプして拳を振り上げた。

誰も訂正はしない。むしろ、通りすがりの市民からは拍手や賛同の声が上がった。

汪はもう一度、目前の砂時計を見据え、一通りの分析を終えた。蹴飛ばして壊せるものでもない。ここは次の情報を得ることに注力すべきだと判断した。

地下鉄の車両に特に変わったところは見受けられなかった。汪は一行とおとなしく乗車した。やはり人気者らしいフィーに声を掛ける者が男女問わず多くあり、フィーはにこにこそれに応じていた。

ウルゼルとエトガルはときどき耳打ちしあっている。睦言<sup>むつごと</sup>というわけではないようで、おそらく汪の件を何かしら相談しているのだと察した。カスパルはあいかわらず汪を見張っており、見つめ合ってもつまらないので、汪は窓の反射越しに車内を観察する。

ふと視線に気づいた。目の細い男が、あちらも反射を介して、それとなく汪を見ている。諜者だと直感した。腕時計をのんびりと見る素振りで、地図を見ながら駅の数数を数えている。汪はピンと来た。

「カスパル君。ベラルースキ駅まではあと何分かな」

「ん？ 時刻表通りだ」面食らった様子でカスパルが答える。「——俺のことはシュミット少尉と呼んでほしいな、大使殿」

「その点では、私とて『敬愛すべき大使様』と大仰に呼ばれ続けるのは面映い。凱威<sup>ガイウェイ</sup>と呼んでくれて構わんよ」

「誰もそんな呼び方はしていないぞ、汪大尉」

ふたりのやりとりを聞いていたはずの間者は、いつの間にか姿を消している。他の車両に移ってさっそく何か画策しはじめたのかもしれない。帽子を目深にかぶっていたが、どこかで会ったような顔だという第一印象だけが臍気に残っている。その安心感と、このままではおれないという焦燥感が、汪の心を決めた。

カスパルとの他愛のないおしゃべりを演じるうちに、ベラルースキ駅に到着した。ホームに降りるとき、誰かが——おそらく諜者が——カスパルに強くぶつかった。それまで汪の裾を掴める距離で付いていたカスパルが、数拍、一行から遅れる。その瞬間を見逃すほど汪凱威は愚図ではなかった。

土地勘のない駅であったが、汪は構内設計と人の流れの合理性を前提とした推測により、妥当な

逃走経路を見出した。同行者たちを巻くことに成功したのだから、それは名推理だったと言える。地上に出る階段まで来て、そこからは人目を引かぬよう歩調を整える。あとは先程の謀者か、その仲間が、接触してくるのを待つ。

地上に出た。照度の違いで視野がぼやける。

何者かが、肘を軽く当てるようにして追い抜いていった。地下鉄で地図を見ていた男だろうが、視力が回復しておらずはっきりしない。汪は男を追って同じように路地を曲がる。——と、そこで足元がふらついた。路面に倒れたのは視野の変動でわかったが、痛覚が鈍い。倒れた音も聞こえたかどうか。

——何かがおかしい。

びっくりした様子で、こちらへ駆け戻ろうとする男の姿が見える。やはり知っている男だった。名前は、そう、カネジュ・イルベチェフ。<sup>セヴェルメドヴェーチ</sup>北熊のマトゥモトフ少将の飼犬だ。

彼は優秀な男だと汪は知っていた。だから、他の通行人が汪に手を貸そうとすると、イルベチェフが安心した顔で踵<sup>きびす</sup>を返して去っていくのを見届けて安堵した。

「無茶はおよしなさい、大使殿」

知らない声の男が、汪を抱き起こす。汪は己の失敗を正しく認識していた。カスパルは他の仲間と連絡を取っていたのだ。それはおそらく、アルバート通りを散策している時点で、そうだったのだろう。

汪の頭脳は、汪がよく知るように明晰である。今もそうである。しかし、体が言うことを聞かない。汪はひとりで立つことができない。

「頭でも打ったか……。カスパル、早く来い。何かおかしいぞ」

男が汪の様子を確かめる。明らかに異常なことは自分がよくわかっていた。明瞭な思考が、何かに、遮蔽されているような感覚。

「私は、正しい。だが、確かに何かがおかしいのだ」

風でドアが閉まるように、汪の意識はそこで急停止した。

## 4

<sup>ワンガイウェイ</sup>汪凱威は市長に会うことなくホテルに連れ戻された。途中、検査と点滴を受けたようだが、その間の意識はなかった。痕跡を自分で調べて気づいたにすぎない。深夜にようやく目覚めて、まだ誰も事態の推移を説明に現れていないのだ。

体は相変わらず重い。だが、動かないということはない。

ベッドから身を起こす。腹は空いていないものの、少し口寂しかった。生の感覚が蘇ってきている。今にして思えば、昼間の自分は、風邪をこじらせたときのように、五感からの情報伝達がフィルタリングされていたと思える。

丸いグラスに水差しの水を注いで飲む。

手中に収まったそのグラスの曲線に、汪は地下鉄の駅で遭遇した砂時計のことを思い出した。

あれは危険である。より厳正な言い方をすれば、危険である可能性が高い。暖炉の谷でも似たも

のを見つけた。彼の地で起こった亜細亜連邦軍の盛大な同士討ちは、あの機器が発する一種のバブルムクフィールドの作用で引き起こされた蓋然性<sup>がいぜんせい</sup>が認められる。また、あの恐るべき消滅砲の放たれる前に、<sup>オフエンバーレナ</sup>啓示軍第六機兵戦隊<sup>エスカドローン</sup>が照射地点となった西フェルガナ基地周辺に類似の大型機器を持ち込んだことも、後の調査で判明している。いずれも啓示軍基幹部隊の用意した戦略的な装置群と戦略軍は推定している。その過程で二言も三言も有益な発言をしたと汪は自負している。

モスクワ市民が啓示軍を受け入れている理由は、あの砂時計にある。仮説の域を出ないが、その前提で行動を計画するのが賢明だと汪は判断した。そして、影響下にあるのは何も市民たちばかりではない。啓示軍の将兵すらもそうであり、まことに遺憾なことに、いまや汪凱威自身がそこに加わりつつある。洗脳の自覚症状がないことは過去の多数の事例で明らかである。このホテルで一週間も飼われた日には、もはや汪は大使などではなく、啓示軍の優秀な技術士官として遇されているだろう。

時間との戦いになる。汪は好機の到来に備えて、成すべきことの算段をひとつずつ立てておくことにする。

取るべき選択肢は大きく三つだろう。モスクワから、あの砂時計の支配下から離脱するのがまず第一。そして第二に、友軍の到来を早めてあれら設備ごと啓示軍を一層すること。これら二つは、今のところ、運を天に任せるような作戦になる。そしてなにより、汪凱威の仕事としては華がない。モスクワ奪還は第二次反抗作戦の主要目標のひとつである。<sup>キムソンヤ</sup>金星也元帥がそういつまでも手をこまぬいて見ているわけがない。汪が脱出せずとも、もしくは突入の好機と知らせずとも、金元帥のやることに大きく変わりはない。それではこの汪凱威の貢献とはなにか、という話になる。いなくてもよいなどと思われては、結局、憤死するしかない。

やはり第三の選択肢が好ましいように思われた。このモスクワを真の意味で啓示軍から解放するのだ。砂時計を破壊し、洗脳を解けば、住民らが啓示軍を追い出すだろう。啓示軍の組織が内部から瓦解することも期待できる。なぜならば、彼らはすでに多くの異邦人の集まりとなっているからだ。そこには亜細亜連邦の構成主体に属する人々も多く含まれる。目を覚まし思い出すことだろう。憎むべき敵は、真の敵は誰か。

——真の敵は啓示軍ではない。

誰かの警句がふと脳裏に蘇った。誰の声だったか。いつこれを聞いたのだったか。

「横浜か」

気づけば自分の声が答えを告げていた。まるでもうひとりの自分が教えてくれたような、夢心地の感覚がよぎったが、一瞬のことだった。

思えば九天軍を隠れ蓑にした「昊天」こと「ケーニヒ」の一党こそ、真に恐るべき敵かもしれない。九天軍の組織を巧みに乗っ取ったのは汪の予測の範囲内だったが、一時的に啓示軍と共闘し、東京と横浜の制空権を握ったかと思えば、さらにその夜のうちに彼らの裏をかき、元老院すら容易ならざるものと位置づける<sup>クンルン</sup>〈崑崙〉を、我が物にしようとした。

度胸や権謀術数も必要としたはずだが、汪が恐れを覚える理由はそれらではない。戦略軍の情報網によればケーニヒらは欧州にいた。啓示軍支配後の欧州だ。彼らは啓示軍と技術的・軍事的に高度なやりとりをしつつ、しかしあの砂時計の支配を受けなかったのだ。今まさに我が身がその見え

ない糸に絡め取られようとしているからこそ、その驚異を認識できる。

汪は水を飲んだ。低熱源が肉体と熱交換していく。しかしその低熱源は肉体の一部となるのだから交換といってよいものか。人の肉体は多くが水分だ。

見方を変えることにした。ケーニヒが啓示軍の裏をかけたということは、何か逃れる術があるということかもしれない。

汪は砂時計の仕様を思い起こす。さきほど地下鉄で見たタイプは、BFGと公称するだけあって、電源はバッテリー式の自立型だった。有線の電源供給は無線に比べて圧倒的に頑健だが、時折の周波数の変調は免れ得ない。その乱れはバルムンクフィールドの維持にとって致命的だ。そのフィールドの内側には、選りすぐった重要な機器類が動作しているのだから。よって住民の生命を守るインフラ保持用のBFGは、スタンドアロンで稼働可能なことが要求される。また、故障を想定して二重三重のフィールド網が張られていることも想像に難しくなく、どこかでプラスチック爆弾なりロケット弾なりを調達できたとしても、砂時計の支配領域を消失させられる期待値は低い。少なくとも、汪が身命を賭すには値しない。そしてケーニヒは知られずにその呪縛を解いているのだから、少なくとも見かけ上、砂時計を破壊してはいないのだ。ソフトウェア的な手法であるとする、少々、汪の手に余る。協力者が必要だ。それも、かなりの逸材が。

汪の作戦検討が進捗せぬうちに、部屋の沈黙は破られた。ノックもそこそこに入室してきたのはカスパルである。

「元気そうで何よりだ」

口とは裏腹に、見舞いというわけではないようだった。カスパルの腕には着替えが抱えられている。啓示軍の制服とひと目で分かるが、サイズもデザインも、カスパルの着ているものとは異なる。

「早速だが、これに着替えてくれ、大使殿」

「私は、実を言うとだが、大使ではない」

「知っているさ。だからこれに着替えてもらう。警戒しなくていい。何も今すぐ啓示軍に鞍替えしろと言っているわけじゃない。これから行先での、ちょっとした都合だ」

汪は制服を受け取って、少し考える。これに袖を通す日が来るとは思わなかった。しかし、ここにいれば遠からず、ありうる話だろう。

「市長のところではないようだな」

「ああ。いろいろと予定が変わった。それは向こうでエトガルが説明する。着替えの手伝いが必要か？」

「大丈夫だ。——いや、手を借りよう。どうやら体が不随意のようだ」

「それも知っている。気を失ったあんたをサイラスとふたりで運ぶのは骨が折れた」

「それは世話になったな」

カスパルとふたり、外へ出ると、空が白み始めていた。用事ができても叩き起こされなかったのだから、カスパルは寝ずの番をしていたのかもしれない。ホテル前に付けられていた自動車に乗り込み、人気のない市街に行く。

着いたのは広大な緑地公園だった。ツァーリの離宮があるとかいう観光地かもしれない。汪は祖

国以外の文化財にはあまり興味がない。決してネガティブな側ではないが、優先度の問題だ。人生は有限である一方、人類の知識はすでに凌雲山の如く蓄積されており、さらに未解明の事象が世界にはあまた溢れているのだから。

車を降りて、公園の奥に入っていく。警備員の他に人はおらず、静かなものだった。明日には砲声が轟くかもしれない。そう思うと身震いする。

無言に耐えられなくなり、汪はカスパルに問うた。

「こんなところでエトガルは何をしている」

「実は、俺もよくはわかっていない。だが、あれを見れば何となく、そういうものかと察するだろうさ。特に、あんたは頭がいいようだからな」

そう言ってエトガルが懐中電灯で照らした先に聳<sup>そび</sup>えていたのは、宮殿かと思いきや、大きな岩だった。カッパドキアから移築した宮殿など、あれば汪でも話に聞いていただろう。つまり、そんなものはないのだ。ではこれは何か。

閃くものがあり、汪は暗い芝生を走った。靴越しに草を踏む感触が妙に生々しく、足を進めるたびに体のすべてが活性化していくのを自覚する。それは脳活動も例外ではない。汪はもはや確信していた。

「これは<崑崙>のかけらだ！」

多孔質でありながら、懐中電灯の光に硬質な輝きを返すその表面は、横浜上空に出現した巨大構造物の表層部分と酷似している。また、建築物ならば地面に対して末広りのシルエットとなるのが常道のところを、ミクロにもマクロにも不規則に凹凸しているその姿は、汪が崩壊する<崑崙>のなかで慄き見上げたそれと由来を同じくするものだと、断じるに十分な証拠だった。

岩塊の周囲の芝生は大きく陥没し、外郭は盛り上がりって塹壕のようになっている。服が汚れるのも構わず四つん這いになってよじ登った汪は、ひとつの疑問に行き当たって足を止めた。まだ<崑崙>のかけらとは十メートル程度の距離がある。しかし、これは小さすぎる数字だった。この岩が、汪が目覚めたのと同じ高度に出現し、そこから重力と空気抵抗に支配されてここへ落下したのだと仮定を置くと、運動方程式を厳密に解くまでもなく、もっと大規模なクレーターが生成されている。つまり、仮定のどこかが実際と異なるのだと汪は理解した。

高度を疑うのはわかりやすい。黒龍隊の時空転移の形跡を調査した限り、いずれも、地表上にほぼ誤差なく出現している。したがって前世紀の都市伝説に出てくる駆逐艦エルドリッジのような惨劇は起きていないが、黒龍隊が守られた機序は明らかでない。変則領域を実験ベースで実用化するバルムンクシステムにはよくあることだが、汪自身は、今回危うく落下死するところだったので、これをもう「よくわからないが経験的にはそんなものだ」と扱うことはできない。

改めて考えてみる。

そもそも地表というのは絶対的な座標条件ではない。地球の中心からの半径座標は当然一定ではないし、なにより地球が公転しているのだから、真空の宇宙に放り出されるのが普通である。そうはなっていないのだから、地表に含まれるコアが相対座標を定義する機能を持つに違いない。その汪らにとっては未知の性質を活用して地表に出現せしめたのが黒龍隊の例なのだ。——ここまでは、黒龍隊の足跡を辿るなかですでに検討済みの仮説である。

今回、〈崑崙〉の出現は、啓示軍やケーニヒ一党の企図したところであった。しかし、その崩壊と消滅、そして時空転移は、何者の手によるものかも不明であるが、それが何者であっても、予め計画しえなかった事態であろう。そのような突発的な処理の結果が、整然とした結果に帰着するとは非論理的である。

おそらく、起こったのはもっと単純な事象だ。たとえば、この岩塊は横浜上空で初期に崩落し、その後地表付近に達した時点で時空転移し、地表との相対高度が保存されるという一般則により、汪との高度差が生じたとすると、首肯しやすい。

あくまで仮説のひとつである。横浜でそんな低空まで落下した崩落物があったなら、街の被害は甚大だっただろう。今、汪にはその状況はわからない。短い期間ながら行動をともにしたRA<sup>ラット</sup>と黒龍隊の面々、そして、かつて霞ヶ浦駐屯地で同じ釜の飯を食った仲間も、一部馳せ参じていたかもしれないが、彼らはいったいどうなったのか。戦局がどう終結したのか。

「凄すぎて茫然自失かい」

隣からカスパルの声が聞こえて、汪は我に返った。

「エトガルはこの岩の反対側だ。案内しよう」

土堀の斜面に古臭い石油ストーブを据え、エトガル・ローゼンはひとりで座っていた。汪とカスパルは岩塊に手を添えて体を支えながら歩いていく。見上げると岩に押しつぶされそうな錯覚があるが、ほのかな明かりの中では上部まで見渡せず、それほど恐ろしくはない。

「こんな時間に、精が出るな」

挨拶がてらに汪が呼びかけると、エトガルが顔を上げた。ヘッドセットをつけていて、ふたりの足音が聞こえていなかったようだ。見ればエトガルの周りにはいくつもの機材が並べられている。汪にはそれらの機能がおおよそ推測できる。ワタナベ方程式を知る者には難しくない。この岩塊を、変則領域にまつわる物体として、調査しているのだ。

「これは何だと思われませんか、汪大尉」

ストーブの灯りで半面だけ照らされた顔は、どんな感情をたたえているのか不明瞭である。

「さて。公園の新しい展示かね」

「汪凱威大尉」エトガルは何かの書付を読み上げ始める。「亜細亜連邦軍の中枢である戦略軍にあって、バルムンクシステムの運用状況を監督する特別運用調整官に任じられた。その抜擢<sup>ぼつてき</sup>には、つくばに奇襲を敢行したノイエーターを亜連側で最初に察知した実績が関係している。また、暖炉の谷でも“ベルリンの壁”突入の陣頭指揮を執り、龍王<sup>ロンワン</sup>による突破を試みた。すなわち、その方法に特別の可能性があると認識していた将校である。要確保対象。——照会で我々が得た情報は、このくらいです。あとは生年月日に基礎的な身体データ。基礎的というのは、身長、体重程度のもので、あいにく、突発性の意識不明に関する適切な処方情報は得られませんでした。訂正すべき箇所がありますか、汪凱威大尉？」

「『優秀な』とか『聡明な』とかという表現が出てこなかったのは不正確かもしれないな」

「ハハ、あいかわらずだ」

「カスパル、ちょっと黙っていてくれ。——その優秀な専門家にお聞きしています。これは何で

すか」

エトガルの視線を一旦かわし、汪は左手で触れているその物体をもう一度見上げた。やはり間違いはない。これは横浜上空で汪が立っていた場所と地続きだったものだ。

「仮に私が答えを持っていたとして、ここで安易にその情報を開示すると思うのかね」

「あなたが聡明な頭脳をお持ちならば、きっと。そして、モスクワを戦禍から遠ざけようとする大使殿であるならば、必ず」

「私は大使ではない。実を言うと、戦略軍からそのような使命は帯びていないのだ」

「軍や政府による裏付けに意味はありません。あなたがそのように行動したということこそが、我々にとって意味を持つのです」

「なるほど。国家という三権と経済システムの裏付けを骨抜きにして併呑しながら、自らは頑なに国家を名乗らない。ハンス・ライルスキーの思想とは、個人間の信頼にまで社会システムを後退させる思想なのだ」

「今はどう揶揄されようとも結構です。過渡期にあっては分析も評価も人の数だけあるでしょう。モスクワの市民も最初から我々を歓迎していたわけではありません。しかし、やがてはあるべきところへ収束していく。——その時定数に対する猶予が、あるならば」

しばしの沈黙。それぞれが何かを考えているようだった。

やがてカスパルが着座を促し、一同は岩に掘り返された土の上に腰を下ろす。

汪は会話を反芻して、状況を整理した。

「つまり、我が垂細亜連邦軍の包圍網は実際に完成されつつあるわけだ」

「そういうことだ」と、カスパル。「ちょっと状況をインプットしないと話が進まないようだからな。喋らせてもらうぞ。すでにモスクワ東方三十キロメートルの位置に陸軍数個師団、南方二十五キロメートルの位置に同数個師団が展開している。昨今の榴弾砲ならモスクワはもう射程圏に収まっている。もっとも、正規の弾頭がどれほど残っているかは知らないが。——とにかく、それに加えて後方には臨時の航空支援用拠点を造営中で、補給も滞りなければ、制空権奪取後は上空からの火力支援も空挺降下もやり放題。さらに、だ。集結しているのは垂細亜連邦軍だけじゃない。米軍が拠点を共有して展開している。これで名実とも反啓示軍連合軍というわけだ」

「ふむ。事態は私が知悉する以上に進んでいたというわけか」

さすがは金星也元帥。そう思った汪だが、そこは飲み込む。

「しかし、解せん、モスクワが飽和攻撃の対象となるかもしれないと知って、なぜあのように市民を放っておくのだ？ 君達も防戦態勢構築に勤しんでいるふうでもない」

「それは簡単なこと」と、エトガル。「我々はここで戦うつもりがないからです。連合軍がモスクワに武力をもって侵入すると言うなら、我々は戦わずしてこの街を発ちます。この意志と、ここに旧来の市民たちが住み続けている事実の二点について連合軍に伝えるよう、ドルグシキン市長をはじめ多くの方々に尽力いただいておりますが、あいにく、何かの策としか思われていないようですね。昼間のように、工作人員を送り込んでくる始末です」

「——何を言っているか、意味がわからない」

「誤解されているようですが、我ら啓示軍にとって、この戦線を維持することは戦略目標ではない

のです。そしていまや、手段ですらない」

「では、なぜここを占領し、欧州、西部方面軍を壊滅させたのだ。領土的野心がなければどう説明するといふのだ」

「戦略目標達成の手段として、それは必要でした。あくまで、一過性の措置としてですが」

「戦略目標とは？」

「世界を救いに導くこと」

「聞いて呆れる。いつの世も戦争は正義の執行という形式を取ってきた。したがって、それでは何も答えていないのと同じだ。支配される市民にとって……」

汪は振り上げていた拳を力なく下ろした。モスクワの市民、亜細亜連邦の市民だったはずの人々は、笑っていた。通りで。地下鉄で。フィーの舞を見て。あの子に石を投げる者などひとりもいなかった。

「救済は、行われつつあるのです。それはあなたも感じているはず」

「さて、命は救済してもらったがね。——話を戻そう。この岩が何かと君は聞いたな」

「造山活動に連なる圧縮応力下で得られた凝塊物でないのは、おわかりでしょう」

「もちろんだ。それに土くれから築き上げたものでもない。これは元老院が＜崑崙＞と呼ぶ巨大バウムシステムエーゼクスの構成部品だ。君らの仲間の E6 が横浜に出現させたが、一晩の紆余曲折を経て、光の泡沫となった。——そう思ったが、一部がここへ落ちたようだ。時空の回廊を超えて」

「そしてあんたも落ちてきた」

「その通りだ、カスパル。私は横浜で＜崑崙＞の中にいた。空を漂う浮島の内部空間にだ。だからこそわかる。あれは啓示軍の作ったものではない。中には軍人も技術者も作業員もいなかった。ただおぞましい鎧虫機がいちゆうきたちだけが跋扈ぼっこしていた。言うなればあれは遺跡だろう。どこの誰が残したものか、あるいは異次元からの落とし物か。その神秘性を私は幻覚と過つことなく受容できる。なぜならば、私はすでに知っていたからだ。神秘なる存在の、その威容を」

「ノイエトーター」

「然り。＜崑崙＞とあの白銀の天使とは由来を同じくするものと私は見る。啓示軍は＜崑崙＞を御してみせた。ノイエトーターをそうしているように。それらをどこで手に入れたか、その謎は私を強く衝き動かすが、しかし今宵そのことは措こう。今語るべきは、諸君らが＜崑崙＞をもって何を成さんとしていたかだ。それは自ずと、モスクワにこれと私が呼び寄せられた理由や、この街を占領し続けてきた理由を示すことになるだろう」

「あなたを呼んだのは、おそらく私です」

「なんと」

「私がオルロフ——この名はご存知でしょうね——を呼び鈴として、本体たる＜崑崙＞との回線を開こうとした、その実験のさなか、この岩とあなたは現れたのです。ノイエトーターがあなたを救命できたのは、先に察知された岩塊への対処、つまり、この公園に落ちるよう軌道修正し、且つ減速を行うために、スクランブルしていたからでした。当初、我々はあなたがたのほうが制御した結果として、この転移が実施されたものと考えた。しかし、どうやらそうではない。横浜での出来事と、モスクワでの私の作為、その両者がたまたま結びついた結果というのが、現在もっとも妥当な

見解と考えます」

「エトガル。俺は端からそう言っていたぞ。汪大尉が時空転移のデモがてらに送り込まれた大使だなんてのは馬鹿げている。亜細亜連邦がオルロフをそこまで使いこなせるなら、転移の先はモスクワではなく、ベルリンかその近郊だろう。送り込むのも平和の大使じゃない。NBC兵器なり特殊部隊だ」

「それは技術の信頼性を無視した考えだ、カスパル。オルロフはまだまだ勝手のわからないバルムンクシステムであって、やすやすと人命を賭したり、中途半端に手の内を明かしたりするのは軽薄だ。僕らには一層の研究が必要なんだ」

「だから汪大尉を引き入れようというのが、安易というか、坊やなんだよな」

カスパルは肩をすくめると、そのまま押し黙った。鞆からおもむろに何かのパウチ食を取り出して、ストーブで炙り始める。

「——カスパルの言ったように、私は、あなたの協力が必要と考えています。これ以上、無益な血を流させないために。貴重な資源と時間を無駄にしないために」

青年の目は誠実だった。汪は同じ眼差しをした同胞を何人も見てきた。彼らと、このエトガル坊やと、何が違うというのか。——そう感情にかまけるのは簡単だが、解せない部分もある。

「なぜだ。なぜ、守りたい。モスクワは戦略的価値を失ったという話だった」

「無辜の市民を救おうという気持ちに国境などありませんよ」カスパルの口笛が聞こえたが、エトガルは無視して続ける。「世界市民たれ。それはハンス・ライルスキー様がお示しになる指針の、最も基本的な部分です。汪大尉ともあろう方が、まだ国境などという前時代的な概念に囚われておいでなのですか」

「私は先進的だからな。もちろん、国境がひとつの方便に過ぎないことは承知している。だからこそその亜細亜連邦である。欧州連合にはできなかった大権の統合をわずか数年で果たした我々を、甘く見てもらっては困る。亜細亜連邦市民こそ、世界市民に最も近い存在だ！」

「その最も世界市民に近づいている集合の、部分集合であるモスクワ市民を、私は守りたいのです。もちろん、この公園やクレムリンのような貴重な文化的資源を大事に思う気持ちもありますが、そちらはおまけです」

「ふむ」

汪の沈黙を説得の好機と見てか、エトガルは話を畳み掛ける。

「手段の話に戻しましょう。この岩を調べていたのは、オルロフとの違いを確認するためです。どちらも<崑崙>の一部でありながら、その性質には違いがある。およそ既知のコア選別に用いられるすべての手法を試してみても、この岩から特に反応はない。生成され、代謝されるだけのものと思われます。人でいうところの表皮、垢といったところでしょうか。しかし、オルロフは違います。オルロフは操作できる。つまり、聞く耳を持っている。そして、<崑崙>を呼び出すことができることから、おそらく伝える口も持っているでしょう。そして……」

「ときに、人の意思をも伝える」

「そうです。やはりあなたはそれを体験したのですね。私の知る限り、それは音波でも光を含む電磁波でもない“何か”ですが、一対多通信を可能とする波のような性質を持つのは間違いのないで

しょう。この力を使えば、我々が静かにここを退こうとしていることを、包囲軍に伝えることができる。指揮系統も階級も軍歴も、望むと望まざるとも関係なく、<sup>あまね</sup>遍くすべての人々にその声が届く。誰にも隠し事や情報の歪曲はできません。そうすれば、亜細亜連邦の同胞を巻き込んだり、民主主義を信奉する自由市民の上に砲弾の雨を降らせようなどは、決してならないでしょう。人類はその程度には進歩したと、私は信じています。しかし、我々だけでは、連合軍が準備万端整うまでの時間に、オルロフを自由に操作する条件を見出せない可能性が高い。汪凱威大尉、〈崑崙〉をその五感で知ったあなたに加わることで、この技術の完成の期待値が大いに高まります。ぜひご助力を」

「——いいだろう。面白い話だ」

「ありがとうございます！」

「いいのか、あんた」

腑に落ちない部分は残っていた。しかし汪は、この話に興味を持ち始めてもいた。情にほだされたのではない。これは新たな可能性である。特別運用調整官という肩書を超える、極めて重大な力を得る好機である。

「よし」カスパルが拍手を打って立ち上がる。「じゃ、まあ乾杯がわりに、このボルシチでも食おうじゃないか」

カスパルが手にしたパウチを切り開くと、汪の鼻腔に芳醇な香りが舞い込んできた。エトガルが何かの蓋——清潔だと信じることにする——を出し、取り分けられたそれを、すすする。

細かく刻まれてしまってもはやなんの具が入っているのかも定かではないが、しかし汪は、こうして石油ストーブの輻射熱を浴びながら三人ですするこの食べ物を、郷愁とともに心地よく飲み下していく。

「うまいな」

「ハフハフ」

「本当か。俺は食い飽きてきたところなんだが」

「汪大尉を迎えてのささやかな宴だ。美味と言わずしてなんとする」

「ハフハフ」

「おかわりはないのか」

「ああ、そんなこともあろうかと、もうひとつ温めてある。——ん、おかしいな。ここに袋だけが残っている」

「ハフハフハフハフピチャピチャハフハフ」

三人の視線が空中で交錯し、やがて俯角に遷移して一点に集結した。

獣がいた。食肉目とひと目で判る。そして高確率でイヌ科だと汪は分析した。

エトガルがうろたえ、カスパルが懐の凶器に手を伸ばし、汪はボルシチのパウチをひったくりにかかった。結果、エトガルは股の下を獣にくぐり抜けられ、カスパルは引き金を引き損ない、汪はすでに空となったパウチを手に入れた。

「おのれ畜生め」

カスパルがエトガルを突き飛ばし、拳銃の有効射程から脱しようとしている灰色の塊に狙いを定

める。汪は気づけば、そのカスパルの腕をうしろから掴んでいた。

「何を。情けをかけるのか」

「情けだと？ ——私は、私はただ、その、なんだ。日本語では、イヌはワンと鳴くらしい。私、汪凱威は同族を大事にする男だ」

そう言う間に、足の早い逃げ犯は夜の闇へと溶けていく。

刹那、汪は何かを思い出しかけたような気がした。

## 5

——起きろ。もう朝だ。

誰かが耳元でそう告げた気がして、汪凱威は目を覚ました。

穏やかな陽射しが窓から差し込み、その輻射熱で温まりつつあるベッドの上に汪はいた。しかしそうなるに至った記憶がない。モスクワにいるのだと思い出したのは、部屋の中のトイレに行つて、そこに鏡がないことに気づいた拍子のことだった。これでは髭を剃れない。紳士の嗜みが。

改めて部屋を物色する。一応、捕虜という扱いのようで、刃物がない。鏡も、割ることで刃物の代わりになることを恐れたのかもしれないと、感心する。盗聴器のようなものは見当たらないが、エトガルといい、カスパルといい、やけに入ってくるタイミングが良すぎた。油断はならない。

「おはようございます。汪大尉。ウルゼルです」

絶対にどこかに盗聴器がある。疑惑は確信へと変わったが、麗しのウルゼルが訪れたとあればそんなことに構っている場合ではなかった。手探りで服装を整えて、鷹揚に「入るといい」と応じる。

入室したウルゼルは、当たり前だが前回と同じ軍装だった。髪飾りが違っているかもしれない。よく覚えてはいないが、褒めておこうか。汪が逡巡するうちに、ウルゼルの形の良い目尻が微笑んだ。

「昨夜はエトガルたちとお楽しみでしたね」

「ちょっと待ってほしい。どういう意味だね」

「酒保からワインまで引っ張り出して、夜が白むまで熱く語っていましたよ。特にワタナベ理論の実践における、ランダム性の評価手法の最新動向について」

言われて、汪の記憶がうっすらと蘇る。お互いに満足のいく機材や観測場所がなかなか揃わない中、いかに理論立てて仮説を打ち立て、有意な結果を導き出してきたか。あるいは、八月の悪夢がもたらした変異がいかに理解し難く、いまだ人類の科学に対する防壁として自然の神秘を守っているか。記憶の混乱はアルコールに起因するものだと汪は結論づけた。

「彼の学識は素晴らしいな。もう少し、現場に出る機会も増えるといいと思うが、しかし現場でいくら勘を鍛えたところで、理論という基礎がない者たちには本質が見えてこない。彼の今後が楽しみだ」

「それは昨夜もエトガルに言っていたセリフですね。おかげでのぼせ上がったエトガルは体内のアルデヒドが処理できずにまだ寝ていますが、まあ、あれは放っておきましょう。ちゃんとベッドに放り込んできたので心配は無用です。それよりも、汪大尉。すでにエトガルが触りはお伝えしてい

と思いますが、早速見て頂きたいものがあります」

「ほう。何だったかな」

「言の葉を届けるもの。オルロフとのアクセスを可能にする、私たちの切り札です」

初めて真正面から捉えたウルゼルの微笑みに心を奪われ、汪はその意味するところがなかなか思いつけなかった。

要領を得ぬままウルゼルに案内されたのは、市の中心付近に位置する工場だった。

それが機兵用に改造されていることを、途中の路面の補強状態から、汪はすぐに看破した。果たせるかな、ウルゼルが何か解説を始めるよりも早く、建屋の下から上まで貫通する大きな扉が開き、中から甲冑姿の紅い機兵が現れた。かつて汪も暖炉の谷でその存在を確認した、<sup>オフエンバーレナ</sup>啓示軍の新型機兵だ。

紅い機兵の、四連のオプティカルバルムンクスキャナが汪とエトガルを見据えた。汪は体が強く震えるのを感じた。同軸に設置されたサブセンサを使って何らかのスキャン——それも侵襲のある——をしているのか。

数秒の沈黙ののち、機兵は再び動き出した。長大な削岩機を棍棒のように担いで、ふたりの脇を通り抜ける。

「ガンを飛ばされた」

「<sup>エーツヴェルフ</sup>E12 のトーデスゲヴァルトです。おそらくワイルダー兄弟の誰かでしょう。しかたがありません。そういう人たちです」

「私が亜細亜連邦の軍人だとばれたのではないか」

「一般の機体のデータバンクに、あなたのための容量は割かれていませんよ」

自意識過剰だ、とまでウルゼルは口にしなかったが、言いたいことはわかった。

トーデスゲヴァルトが開け放しにした<sup>もんび</sup>門扉から、工場の建屋に入る。すぐさま汪の足を止めたのは、内部の壮観だった。

数体のエントゼルトゾルダートが整備を受けているほか、オーバーホールか現地生産方式なのか、今まさに組み立て中の機体もある。それらは整然と白いラインで区画された領域に分類され配置されており、機兵の頭上を縦横無尽に走るレール式ロボットアームが、交換部品や大型治具などを需要者に供給して回っている。よく見ればそのアームの一部はエントゼルトゾルダートと同規格で、実戦で使えなくなった廃品を再利用しているようだった。広く取られた機兵用通路では、整備の終わったエントゼルトゾルダートが調子を確認するようにゆっくりと自走している。

汪は深く嘆息する。これほどの拠点が街中に整えられているとは思わなかった。それも、ここは啓示軍にとって占領地である。亜細亜連邦で機兵の運用準備が本格化したのは、モスクワを失ったあとのことだった。つまり、一年にも満たない期間でこの工場は世界指折りの機兵整備工場へと変貌したのだ。

ウルゼルに簡単な解説も受けながら、感心することしきりで工場の歩行帯を進んでいった汪は、ふと工場の片隅に、雑然としたゴミの山を発見した。修理困難なまでに破損した機兵の肢体や、見覚えのない——それでいて中古らしき——オプション装備がうず高く積みまれている。

「この工場は素晴らしいが、整理整頓については改善の余地があると指摘せざるを得ないな」

「それはどうもご丁寧に！」

何者かにいきなり背中をどつかれて、汪は前によろけた。とっさにウルゼルの体に捕まろうとしたが、さらりと避けられ、脚が絡まった挙げ句、もんどりを打って床に転げる。

下手人は、現場監督のような<sup>たたず</sup>佇まいの女性だった。汪に転倒相当の力積を与えたのは、彼女のふくよかな肉体のなせる技だったようだ。標準の二倍程度と汪は目算する。

「あら、ヤナ。あとで紹介しようと思っていたのだけれど。早耳ね」

「ウルゼルに耳で褒められるとは光栄だね。でも、うちの工場を見てしきりに感嘆する声が聞こえたんじゃ、工場長として、顔を出さないわけにはいかないじゃないか。ようこそ、ご客人」

差し伸べられた手は、汪を助け起こすにじゅうぶんな<sup>りよりよく</sup>膂力を備えていそうだったので、遠慮なく力を借りる。

「汪凱威だ。故あって、ウルゼル君たちに世話になっている」

自分の扱いがどうなっているかわからないので、汪は表現に気を使った。所属など尋ねられるかと危惧したが、それはなく、相手の自己紹介が始まる。

「あたしはヤナ・シュプリンゲル。この<sup>エルヴェイクス</sup> RWXモスクワ工場の工場長をやっている。もっとも、現場主義の行き過ぎで、よくこうして現場で働いちゃうのが悪い癖」

照れ笑いするヤナだが、ウルゼルはゆっくりと首を横に振る。

「いいえ、そういうあなただからこそ、私たちのプロジェクトの重要な要素なのよ」

そう言ってウルゼルが見やった先、機兵や設備の隙間から、真珠の如き輝きが見え隠れしていることに汪は気づき、息を呑んだ。

工場内で走るのは<sup>はつと</sup>ご法度だが、両足が同時に接地する瞬間さえあれば走ったことにはならない。その限界の早足で進み、果たして汪は、その輝きの源をしかと目にした。壁際で膝をついてうずくまっているのは、両肩に翼のようなものを生やした機兵であった。

「ウルゼル君、あれは、ノイエーターの新型かね!？」

「いいえ。ノイエーターではありません。しかし、ノイエーター用の新規開発部品を一部流用しましたから、その推定には合理性があります」

「すると、これが切り札とやらか」

「ヴィオレットヴィカール。エトガルがそう名付けました」

さらに近くに寄って見ると、たしかにそれは、トロイパペズルダートをベースとした改造機であるようだった。装甲の色味もノイエーターの白銀よりも絹布に近い。そしてエトガルが授けた名の通り、すみれ色の装飾模様が添えられている。

「なぜ、ノイエーターを増やすのではなく、これを作ったのだね」

その問いは、啓示軍はなぜ圧倒的な性能を誇るノイエーターを量産せず、エントゼルトゾルダートばかりを量産したのかという質問の延長にあり、亜細亜連邦において何度も議論されてきたことだった。ノイエーターの製造または運用に技術的制約がある蓋然性は極めて高いというのが、いつもの結論の最大公約数だ。しかし、ウルゼルならば、たとえ実情を知る立場になかったとしても、より突っ込んだ合理的観測をしているかもしれない。ウルゼルほど聡明な人であれば。あ

るいは、組み上げに深く関与しているらしいヤナならば。

しかし、それに答えたのはウルゼルでもヤナでもなかった。

「ノイエーターって、ルックスも歌唱力もあって、みんなを幸せにする人気歌手。でも、自分の気持ちを詞にして伝える、言葉だけじゃ足りないところを曲で補う、そういう姿が本来の歌なんじゃないかと、ボクは思うんだよね」

ヴィオレットヴィカールのコックピットから、銀色のワンピース姿が躍り出た。そしてワイヤーも手すりも使わず、機体の小さな突起を足場にして、軽やかに降り始める。衣服をひっかけないかという汪の心配をよそに、何事もなく床に降り立った。

「フィーくん。君はこんなところで何をしている」

「息抜き！」

「時間があるなら図書館で勉強でもしたまえ。戦時下でいろいろ事情はあるだろうが、君のような若い子が仕事ばかりしているのはよくない」

「実社会で働くのがいちばんの勉強じゃない？」

両腕を広げてのアピールは、かわいらしかったが、しかしそんなことで論旨をうやむやにする汪凱威ではなかった。

「それは、労働者に知恵をつけてほしくない、悪徳な支配階級の言い分だ。自分を守るためにこそ、まず勉強が必要なのだ」

汪の頭をよぎるのは、フィーと年頃も近い、一人の少女である。ケーニヒの一派が文字通りの懐刀としている、<sup>ふちなありあ</sup> 瀏名亜璃亜。あのような殺人マシンになってしまうと、子供といえども、殺傷を許容せざるを得ない。フィーも前線で慰問ということが続けば、血なまぐさい話を当たり前のように受け取るようになっていき、人道に外れた行為を積極的に褒めそやす言動を始めるおそれがある。

ちらりとウルゼルに視線をやると、目が合った。

「汪大尉。親の庇護を受けられない子供の数が、今、世界にどのくらいいると思いますか」

「さて。数など考えたこともないが。子供を全人口の二十五パーセントと仮定して、そのうち一パーセントが該当すると見て、一千万人強といったところか」

「大尉のご友人には百人に一人の割合だったかもしれませんね。信頼の置ける統計が取れていない近年、平均の把握は極めて困難です。ただ、それでも、私の周りでは約三十パーセントだったという過去を知らせることはできる」

「君は、<sup>ナインティナイナーズ</sup> 九九年組か」

「定義にもよりますが、肯定により生じる齟齬は些末であると認めます。当時の子供は、もう大人になっていますが、不安定な生活基盤からは、不幸の再生産が続いています。親の庇護を失うとは、死別だけを意味しません。人身売買のはびこる地域もあると聞きます。加えて、今次大戦の影響も……」

「ウルゼル君、何が言いたい」

「恵まれた環境にある者を恨むのではありません。ただ、社会の闇で溢れかえっている悲劇を、知ってほしいのです。その陽向と陰とは偶然の剣で切り分けられたに過ぎません。そして、これからもそうでしょう。変則領域がこの世を今後どのように切り裂いていくのかわかりませんが、宇宙

があり、人類がある限り、起きて食べて遊び学び交わり寝ていつかは死ぬという営みはそこで続いていきます。そのありようは人が自ら決めることができます。私は、私たちは、幸福の総量は有限ではないと信じます。しかし人ひとりが実体験で知ることのできる世界はいかにも狭い。だからこそ、このヴィオレットヴィカールが必要だったのです」

「幸福の最大化と分散の抑制か。それがハンス・ライルスキーの教義かね」

「可能な限り厳密性に注意してお答えすると、そのように解釈した集団があり、それに基づき立案された作戦を、許可したのがハンス・ライルスキーだったということです」

ウルゼルがそれで十分としていることは、紛れもなく武力をもった組織である啓示軍が無辜の民を虐げている側面を無視していると批判することもできたが、汪はそれを選ばなかった。組織とは矛盾をはらむものだ。それが巨大であればあるほど。統制がその矛盾を押しつぶし、規格化していく。そんななかで個人としての意志を持ち続け、さらに行動に結びつけていることは賞賛に値する。

ウルゼルはケーニヒ同様、啓示軍の精神支配を受けていないのかもしれない。その点については慎重に探っていく必要があるとも認識し、汪は話題を変えた。

「ところでフィーくんは、こんなところに来て楽しいのか」

「それは言わないでよ。無神経だなあ」

汪は意味がわからなかったが、オルロフへアクセスするという機密の塊、ヴィオレットヴィカールの説明を受けるうえでフィーの存在は邪魔なので、とにかく追い払いたかった。ウルゼルに助けを求めたかったが、しかし、彼女は敵だった。

「フィーのことなら気にしないで結構です。VV<sup>ヴィヴィ</sup>のことはフィーも勉強済みです」

「なんと。慰問部隊というのもずいぶんと忙しいのだな」

またしても意味がわからない。とはいえ今はフィーよりもヴィオレットヴィカールのことを知りたい。

「この機兵は戦闘よりもオルロフとの通信機能を主眼として設計されていると、そういう理解でよいのかな」

フィーの説明を踏まえ、かつ、機体を取り巻くスタビライザ状の機構を見れば、特別運用調整官たる汪凱威には容易な推論である。果たせるかな、ウルゼルが<sup>うなず</sup>頷き、ヴィオレットヴィカールに特有の部品について足早に説明がなされた。技術的な詳細はヤナが都度補足するが、ウルゼルの説明も決して誤りではなく、本質をよく理解していることが窺い知れた。そして、ウルゼルの語る根幹と、ヤナの解説する枝葉と末節の精緻を知るにつれ、昨夜のエトガルとの会話が少しずつ蘇り、理論と実践との対応が汪の頭の中で整理されていく。

「オルロフはその性質として常にどこかで耳を敬て、囁いている。そこへ見えない糸電話を繋ぐのが役目ということだな。そのために多種多数のバルムンクフィールドジェネレータと、電源の安定化装置が搭載されている。これは武装への電力供給にも転用できそうだが……。いや、逆か。武装用の電源を改造して使ったのか」

背後のゴミ溜めを振り返る。あれは部品取りのため取って片付けずにいたらしい。ヤナはどうだと言わんばかりに胸をそらしている。

「そんななかでも、大きなトラブルに見舞われることなく稼働にこぎつけたのは幸いでしたが、完成までは今一步です」

「問題は何かな」

「オルロフとの一対一通信、つまりは糸電話ですが、これについてはほぼ送信専用という限定付きで、手順を確立できています。その先、オルロフからの一対多通信、“バルムンククラウド”を作動させるトリガ条件を、未だ探り当てられていないのですが、課題がハード面にあるのか、ソフト面にあるのか、エトガルも判断しかねているようです。時折、こちらからの入力に呼応して何かの情報発信を行っているようで、もう当初の目標は達成したと言ってもいいくらいですが、成功を得たエトガルは、目標を引き上げました。機械による翻訳を介さず、人間が直接認識できる意志通信、“雲”を実現するのだと……」

「エトガル君は正しい。そうでなければ連合軍を撤退させるなど夢のまた夢だからな。しかし、課題は課題だ。それで困ってこの私に泣きついてきたというわけだな。飲み込めてきたぞ。まことに、エトガル君が私を頼ったのは慧眼である。これは得意分野だ。任せておきなさい」

「やったね、ウルゼル。これでみんなの夢が叶うんだ」

「期待しています、汪大尉」

「理論寄りの話ができそうで楽しみだ」

三名の期待の眼差しを受け、汪は大仰に咳払いをした。これからは、特別運用調整官を超える何者かとしての、第一歩である。

「まずは現状把握のため、ヴィオレットヴィカールの UIの説明と、オルロフのモニタ情報を見られるようにしてくれたまえ」

「それならあたしが、と言いたいところだけど、コックピットは不得手だもんで、ここらで工場長のお仕事に戻るとしようかね」

「いいわ、ヤナ。任せて」

コックピットはタンデム式の複座になっており、ウルゼルが前部席に乗り込み、汪はそれをハッチの上から覗き込む格好になった。後部席は空いていたが、それでは前部席の UIを見渡せないからだ。鼻孔をくすぐる香水の揮発成分がフィーとウルゼルのどちらのものかという疑問は、やがて説明が進むうちに汪の思考からはすっかり追い出された。鹵獲したエントゼルトゾルダートのコックピットは汪も何度か確認したことがあるが、この機体の UIは互換性を保ちつつも改良が進んでいる。また、鹵獲機では開放がかなわなかったメンテナンスモードも使用でき、そこでオルロフとの通信用の様々な機器の調整を行う様子は、汪の知的好奇心を存分に満たした。

ただし、肝心のオルロフに関しては、汪の満足は得られなかった。与えられたモニタ情報は、電位、温度、相対バルムンク反応などの数値情報のみ。その視覚的な情報は一切得られなかった。

「どうにかならないかね、ウルゼル君。現地、現物、現実を当てるのがすべての基本だ」

「いくつかの理由で、許可できません。ひとつは保安上の問題です。オルロフを誰かに閲覧できる状態で管理することは、警備の必要を生じ、かえってその存在を知らしめます」

「知られて困るのかね。モスクワの市民がこれだけ懐いているというのに」

「とぼけてもだめですよ。市民の協力は自発的なもの。それは裏を返せば、反抗的な思想の持ち主

も、一定の脅威にならない限りは野放しにしているということでもあります。そこへつけ込もうとする連合軍の動きもある。実際、工作人員と逃げようとしたのはどなたでしたか？」

それを言われると汪はぐうの音も出ない。

「さらに私たちにとって重要な理由があります」ウルゼルは続ける。「オルロフの場所がわかると、現在進行中の試験において、被験者の認知にバイアスがかかります。なんでもない雑音や日差しを、何かのメッセージと感じ取ってしまうことや、自ら脳をだまして幻覚を作り出すおそれも専門家から指摘されています。そのため、オルロフの場所を把握しているのは、この計画に携わる者の中でもごくわずかです」

なるほど知的な判断であると汪は頷く。

「ところで君は知っているのか」

「ボクは知らないよ」と、退屈そうにしていたフィーが横入りする。「何度せがんでも、エトガルが絶対見せてくれないんだ」

「つまり、エトガルは見たことがあるのだな。ま、第一人者として当然か。しかし、それでは……」

昨夜は饒舌<sup>じょうぜつ</sup>だったエトガルの、寂しそうな顔が浮かぶ。まるで同じものを見ているかのようにウルゼルもまた目を細めた。

「そう、エトガルはVVでオルロフと交信する被験者になれません。保管場所だけなら、エトガルに知られないように動かすことも可能ですが、実際に見てしまった印象が、決定的な軛となるのです」

「見てきたような言い様だ」

「ええ、私はエトガルのお守りで一緒に確認しましたから。かえって、彼の力になれないことになりました」

「やんぬるかな。人生とは不随意なものだ」

ウルゼルの肩に手を重ねようとした汪は、その手を突然、小ぶりな手に掴まれた。

「そんなことはないよ！」フィーが汪の手をくるんで上下に振り動かす。「変えられないって、自分で決めてしまった時点で、それは本当に変わらなくなってしまうんだ。ボクは変えることを選んだ。そして、実際、変われたんだ。——まだ理想とは隔たりがあるけどね」

汪は、まだ垢抜けない田舎娘のフィーというものを想像しようとして、失敗した。そんな変化では不釣り合いな気がしたのだ。フィーはもっと重要なことを言っている。しかし他に具体的なイメージは浮かんでこなかった。手に伝わり続けるフィーの体温がそれを阻害しているのは間違いなかった。汪凱威の人生にこれまで欠けていたのはこういう瞬間だった。

「あ、勘違いしないでね」

汪の顔にただならざるものを感じたか、フィーがかぶせていた手を広げて、ひらひらさせる。

「ボク、女の子じゃないんだよね……」

天使の微笑みには違いなかった。天使であるがゆえに、性別を超越した美しさなのだと納得できなくもない。理屈としては。それでも、汪は自分の硬直した顔面を再び動かすのに一分ほどを要した。

「いやいや、私は別に、勘違いなどしていないとも。ジェンダーフリーという、欧米で昨今はやりの考え方は、知っている。私は博識だからな！」

「その割には、ずいぶんと固まってたよね」

フィーがぎこちなく笑う。

「そ、そうだったかね？ 時空転移の後遺症かもしれないな……」

「そうなのですか、大尉？」

「いや、ウルゼル君、心配するほどのことではない。この不自由な体にも慣れたものだよ。ははははは……」

よく見れば、スカーフの合間から覗く首筋には喉仏が浮いて出ているし、さきほどの手も、標準的な少女の手にしては、少し骨ばっていたような気がする。サインはあったのだ。しかし、汪は囚われていた。フィーが美少女であるというバイアスに。

無自覚なバイアス。それは啓示軍に参加し、あるいは支援する人々にも言えることだ。これと闘うことなくして、自らの尊厳と自由意志は保たれぬ。汪は意を決した。

「ウルゼル君。オルロフの実物の件だが、まずは私も、隔離された状態で実験を進めるとしよう。この場所からでも、オルロフとの通信試験はできるのだろうか？ そこから見せてもらおうじゃないか」

「ご理解に感謝します。——ちょうどエトガルも追いついたようです。あとは彼に任せます」

「え、あ、君は立ち会わないのかね」

残念だ、という言葉で汪は飲み込む。ウルゼルの首筋にそれとなく焦点を合わせたくなったが、ウルゼルは視線をそらなかつたので、理性でもって汪は欲求を制圧した。

「フィーを病院に送る時間なので。おいで、フィー」

「はい。エトガルったら、寝坊助なんだから。すれ違いだよ……」

口を尖らせつつも、フォーはおとなしくウルゼルに連れられていく。

汪はその場に取り残された。重要機密であるヴィオレットヴィカールを、起動状態のまま。

「そこまで信用して……。いや、あるいは啓示軍とは……」

独白の先を飲み込んで、汪は思索を巡らせた。エトガルが入れ違いにやってくるまでの、ほんのひとときの間だけ。しかし、それで十分だった。

## 6

汪は初日のうちにヴィオレットヴィカールの改造要綱を作成し、それはヤナ・シュプリングルや彼女の指揮下の優秀なスタッフの手により、二日後に完了した。

その間、汪は作業進捗やテスト結果の確認とアドバイスのために、しばしば整備工場へと出入りしたが、常にエントゼルトゾルダートが何体も運び込まれ、損壊した手足や消耗品の交換を受けてはまた出ていく光景がたびたび見られた。ヤナが打ち合わせや資料チェックをしながら袋菓子や次々に平らげると同レベルでの日常だ。

モスクワ近郊で小競り合いが多発していることは自明だった。やはり連合軍はモスクワに迫っている。そして、エトガルが語ったほどには、<sup>オフエンバーレナ</sup>啓示軍が撤退を前提に考えているようには見えない。ただし、暖炉の谷の例もある。エトガルは技術的に慎重な立場をとっていたが、実は時空回廊

でいっきにベルリンへ全部隊を撤退させる算段かもしれない。

自分がうまく言いくるめられ、単なる啓示軍撤退の手伝いをしているという可能性を、汪はとうに考慮済みである。その点にはよくよく注意して作業にあたっていた。啓示軍が逃げるなら、それはよいが、見逃せないのはその過程だ。つぶさな観察と鋭い洞察によって、大規模時空転移の技術の要点を把握できたなら、その後SMITS<sup>スミッツ</sup>の顧問としてでも、特別運用調整官の長としてでも勇躍できるだろう。

汪がまた、新たに自走で入渠<sup>にゆうきよ</sup>する機兵の姿を眺めていると、エトガルが電話を終えて戻ってきた。

「お待たせしました」

「相手はウルゼル君か、フィー君か」

「ウルゼルですよ。彼女はオルロフのほうに回っているのです。こちらの声は全く聞こえてこないとのことでした。——フィーが関係ありましたか？ 今日には任務の予定があったはず。夕食にはまた同席できるかと思いますが」

「いや、いいのだ。忘れてくれ。それよりも、だ」

汪はエトガルの肩越しに、傷一つない無垢<sup>むく</sup>の機兵の姿を見やる。

「ヴィオレットヴィカールを、どうしてここから出さないのだね。機兵が顔を出したら見えてしまうような場所にオルロフを隠しているわけもあるまい。ゲインも落ちるしノイズも増えている。まだロバスト性を評価する段階でもないだろう」

「さすが、いい質問ですね。実は近距離での通信にはもう成功しているのです」

「そうなのか？」

「はい。詳しくはバイアス要因になるので、これまでお話ししていませんでした……。しかし、距離が離れると声が届かなくなってしまう。そこが課題でした。市内でこれですから、連合軍に対して届けるには大きなステップアップが必要です。何が原因であるのか、それを明らかにするために、敢えて条件を厳しくしているところです。ロバスト性評価の予備検討でもあります」

「私の指示した調整で、VV<sup>ヴィヴィ</sup>の発信出力を強化できたはずだ。改善していないのか」

「オルロフ側に変化があったのかもしれませんが。あれの挙動も安定していませんから。——しかし、いずれにせよシステムのロバスト性が不足しているのは確かです。どこから手を打てばいいか……」

「待ちたまえ。君はどうやら、思考<sup>あいろ</sup>の隘路にはまりつつあるようだ。現状をおさらいしよう。まず私たちは、オルロフに“雲”<sup>クラウド</sup>なる一対多通信環境を形成させ、連合軍将兵に直接メッセージを届けたい。いいかね？」

「はい」

「ヴィオレットヴィカールはオルロフの制御器としてカスタマイズされており、実際、近距離では“雲”<sup>クラウド</sup>の構成要件の一部を満足する環境を構築できた。ここまではいいかね？」

「はい。ヴィオレットヴィカールに乗った私の声を、というよりは発言に伴う脳波パターンとでもいうべきものを、オルロフ側が受信し、そして被験者の脳に伝達しました」

「具体的には、何を伝えたのだね」

「——フィーの誕生日プレゼントに関する私の意見を」

「それは、相手の脳で再現ができる、つまりは相手がかつとも知っている概念の集まりという制約条件を守っているわけだろう」

「そうです」

「しかし、それは君やフィー君のことよく知る人物、たとえばウルゼル君であれば、低くない確率でわかってしまうのではないかね」

「話題そのものを、オルロフを介した通信でしか伝えていません。したがって、そもそもフィーの話題であることも彼女は知らなかったのです。しかし、彼女は見事に言い当てた」

「ただウルゼル君が超能力者だったかのように聞こえるが」

「そんなまさか。ヒトにそのような能力があるわけはありません。あくまで科学的な話ですよ」

「私も科学の話をしている。まあ彼女が特別かどうかという話は今宵に取っておくとして……。ところで、君のプレゼント案について聞き取りが一致したのは被験者の何パーセントかね？」

「九十五パーセントです。二十人中で。補足すると、これは繰り返し実験を行ったのではなく、同時一対他通信でしたので、答えを漏れ聞いたという可能性は排除されます」

「なるほど。そこまで実績があるわけだ」

汪は横浜で聞いた声を思い出す。あれはおそらく、戦場にいた多くの将兵に、警官隊に、テロリストに、避難しそびれた市民たちに、届いていたに違いない。エトガルの言うところの、“雲”<sup>クラウド</sup>だ。この若者の想いに報いるには、あれを再現してみせる必要がある。

「しかし、エトガル君。よく考えてみてほしい。対象は本当に二十人だけだったと、君は断言できるかね？」

「間違いはありません。データをお示しすることもできますよ！」

「やや、興奮するのは早いのではないかね。君のデータはなるほど正確だろう。私が言っているのは、君がデータ収集の相手とした対照群にだけオルロフは信号を届けたか、ということだ。オルロフの伝達メカニズムが未詳である以上、その伝達可能範囲と指向性、選択性について、音や電波のように考えていいものか、という問いでもある」

エトガルは呆けた顔でしばらく汪を見つめていたが、やがて目を輝かせて言った。

「すでに成功しているかもしれないと、その可能性を指摘しているのですね、汪大尉」

「ま、あくまで可能性のひとつだよ」

「仮説を立てば、逐次それを検証していただけます。他にお考えは？」

「——いや、まだないな。私も考え中だ」

「では、さっそくひとつ、試してみましよう。バックアップをお願いします」

エトガルはヴィオレットヴィカールの充電完了を確かめ、コックピットに入っていく。汪は続いて後部の座席に収まった。以前に龍王肆番機<sup>ロンワンシ</sup>でやったのと同じく、汪の仕事は機兵を操ることではなく、バルムンクシステムの監視と操作、データのリアルタイム解析である。もっとも、亜細亜連邦の龍王<sup>ロン</sup>や龍などよりもインターフェースは洗練されており、今日までのエトガルの見よう見まねで、汪にもそろそろ散歩くらいはさせられそうだった。

機兵を最初に生み出した啓示軍の面目躍如か。

——否、と汪は思う。機兵が人類文明に由来するものだとはい決まっていない。技術的な源流が、おそらくどこかにある。乗備機じようようきの発展として機兵が開発されたという一般向けの説明は、少なくとも亜細亜連邦においては、半分以上が嘘である。両者を構成する技術は一線を画している。重要な技術は SMITS が握っていて、汪も詳しいことはわからない。啓示軍から諜報で入手したのか、それとも共通する根を持つのか。

はっきりした証拠はつかめないが、汪は特別運用調整官の仕事をこなすうえで、とうに察している。八月の悪夢は自然現象ではなかったし、変則領域が猛威を振るい世界が混乱する中で、元老院は某なにがしかのアドバンテージを持っていたからこそ、亜細亜連邦を打ち立てたに違いない。そして、決して幻ではなく変則領域が存在すればこそ、鎧虫機のような異形の生物の存在も、成立する。

一九九九年を境に世界は変わったと、よく言われる。実感としては汪もそれを首肯する。しかし、宇宙の摂理は過去数十億年、変わったようには見られない。ならば、変わったのは、認識だけではなかったか。宇宙はもとから変則領域を抱えていたのだ。人類はそれを一九九九年まで知らずに、あるいは信じずに、もしくは何者かのかけたヴェールによって遠ざけられて来た。科学が靈異を駆逐した、人類こそ万物の靈長だと。

そんななか、信仰ではなく科学技術としてその隠された理を知り、畏れつつも操る人々が、どこかにいた。それが表に出てきただけではないか……。

——真の敵は啓示軍ではない。

頭の中で誰かの声がする。

「どうされました、汪大尉？」

エトガルで汪は我に返る。汪が後部シートに収まったきり無言なので、心配したようだった。

「問題ない。少し考え事をしていた」

「そうでしたか。いえ、それなら良いのです。大尉にはいろいろと思案を深めて頂きたい。私はもしかして、また大尉が意識を失ったかと……」

「心配ない。あのときは、時空転移の直後で疲労が出ていたのだろう。暖炉の谷から転移した将兵にはそのような症例がなかったかね？」

「いえ、特にそうした報告は受けていませんが……。実は、私もあまりベルリンには戻っていないので、向こうでは調査が進んでいるのかもしれませんが。すみません、その件は私の手配不足でした。今夜、問い合わせを……。いえ、今、病院に行きましょう。基幹部隊付きの軍医がおります」

エトガルはかぶっていたヘルメットを脱ぐと、汪を急き立てて、ヴィオレットヴィカールから下ろす。身柄の責任者としての使命感に燃えているようだった。その若い情熱に打たれ、汪はおとなしく従った。

着替えて病院に向かう車中で、汪はエトガルに思い切って尋ねた。

「エトガル君。さっき、基幹部隊付きの軍医という話があったな。基幹部隊といえばノイエーターを運用する啓示軍の中核部隊と認識しているが、実際はどうなのだ。戦闘部隊ではない？」

「難しい質問ですが、例えて言うなら、営業でしょうか。“<sup>ツァイガ</sup>指針”たるハンス様のご意向に則り、各地の実行部隊を指導し、また、実行部隊からの要望や情報を持ち帰り、ハンス様に報告と献策を行う部隊です。ときには率先して事に当たることで模範を示しめます。そのために、自前の戦闘部隊を持ち、輸送などの<sup>へいたん</sup>兵站支援の能力も有しています。そうした組織を支え、そして何よりもハンス様の幅広い視野に対応するために、基幹部隊を構成する人材は多種多様です。機兵パイロットや技術者、軍医もいれば、調理師も、記者も、デザイナーも、自然科学者も、セラピストもいます。共通点といえば、ハンス様のご意思をよく理解し、そして伝えられるコミュニケーション能力に優れることくらいでしょうか。そういえば、ドイツ語は必須と聞いたことがあります。私はドイツ人なのでそれを障壁とは思いませんが、何を壁と思うかは人それぞれですね」

「面白いな。コミュニケーションに長けた精鋭というのなら、まるでオルロフだ」

「なるほど！ 大尉は面白い例えをしますね。しかし、オルロフのコミュニケーション能力は、基幹部隊の最も有能な伝道者をも超えるでしょう」

「そのオルロフを制御できる君は、基幹部隊のなかでも要職を占めるにふさわしいのではないかね」

「——私は、基幹部隊の所属だと名乗っていませんよ」

「しかし、そうだろう。ウルゼルもそうだ。君は隠し事には向かんね」

「よく言われます」

「結構なことだ。君は隠したいのではなく、伝えたいのだから。このモスクワの現実を」

エトガルはしばし沈黙する。感動したというわけではないようだった。汪は可能性を五分五分に見ていた。エトガルがただのロマンチストであるか、戦略的思考を備えるロマンチストであるかという命題に対して。

「エトガル君。モスクワを救いたいという君の言葉は、嘘でもないが、正確な表現でもないな。君らはもっと大きな期待をかけている。オルロフを通じて声を伝えたい相手は包圍軍だけではないのだろう。オルロフは所詮端末に過ぎないが、<sup>クンルン</sup>＜崑崙＞そのものの規模を考えれば、送信範囲はこのユーラシア大陸、いや、地球に生きる全人類を相手に語りかけることも可能かもしれない。技術的な地盤固めが必要だから、徐々に段階を追うことにはなるだろうが、このモスクワはいいステップになるだろう。違うかね？」

エトガルは車を路肩に停めると、ようやく口を開いた。

「ヴィオレットヴィカールの改良は見せかけだったのですか？」

「まさか。私はそれほど凝ったことはできない。私は自信を持っているよ。あれはもう、オルロフとの遠隔通信機能を確立している」

「それでは、我々の理想がご理解頂けた？」

「大義名分はわからないでもない。しかし、啓示軍が数多の国家を武力で制圧したことは事実だ。一度武力で成功した者は、必ずまたいつかそれを使う。君たちは当初の戦略目標を達成しつつあるかもしれないが、啓示軍が存在し続ける以上、戦略目標は更新される。そのとき、困難な課題に直面しないと切り切れるかね？ あるいは、困難を前提としないありふれたものを目標として、人々がついてくるのかね？ 啓示軍という組織は、構造上、武力行使を必要としている。モスクワで戦わずに済んだとしても、その矛を折る計画は、ハンス・ライルスキーは持っていないだろうね」

「——それでは、どうなさいますか。ヴィオレットヴィカールを使ってモスクワを救った、その後は」

エトガルの声は震えている。汪はフロントガラスに顔を向けたまま、視野の隅で、蒼白な顔の反射像を見ている。

「君は考えていなかったのかね？ 私は考えた。第一段階の成功は疑うべくもないのだからね。モスクワは無血開城させ、啓示軍は欧州へ引き上げる。市街地以外で追撃戦が発生するだろうが、ま、それはこの際、些末なことだ。むしろ、目眩ましに大いにやってくれたほうがよい。——第二段階、すなわち、オルロフとヴィオレットヴィカールの足取りを隠すためにはな」

運転席に顔を向けた汪と、エトガルの視線が交錯する。

「あなたは、一体、何者ですか」

「亜細亞連邦戦略軍、特別運用調整官の汪凱威<sup>ガイウエイ</sup>。今までは、だ。これからは、全世界思念送話装置<崑崙>の運用調整官である。そしてエトガル、君が<崑崙>を操るのだ。未だ誰も成し遂げていない、その能力を、我々は開発した。金星也元帥<sup>キムソンヤ</sup>も、元老院も、アメリカ合衆国も、ハンス・ライルスキーやアルベルト・ヴェーバーも、もはや君と私を無視はできない」

「叛逆<sup>はんぎやく</sup>の誘いには乗れません」

「私にとっての叛逆とは、自らの魂の求めるところに背くことだ。君の理想はハンスやアルベルトのそれと全くの同一なのかね。モスクワを戦禍に巻き込むまいという君の心は、彼らの指示によるものか？ もしかすると、彼らはそのような気遣いなど一切なく、戦略的観点から、モスクワ市民ごと連合軍を葬る仕掛けを進めているかもしれない。少なくとも、もう少し君の意向に理解があるなら、今以上に手厚い人材と機材が揃っていきそうなのだが」

「ハンス様は……。あの御方のお考えは、余人がすぐに悟れるほどたやすくありません。ですが、少なくともアルベルト様は、今回の作戦に賛同してくれています。カスパーとて今となってはただの幼馴染<sup>おきななじみ</sup>ではなく、貴重な戦力なのです。それを割いて頂いている。私は決して孤独ではない。——汪大尉、あなたこそどうなのです」

「私が孤独かだつて？ まあ、理解者は少ないかもしれないね。君ほどに私の理論を理解できる人間は貴重だ。しかし、精神的な欠乏感を覚えるかということ、特にないな。私が私のやりたいようにやるうえで、優位に進められる状況要素を揃えたいという戦略的判断に過ぎない。私は別に人肌なんて微塵<sup>みじん</sup>も恋しくないのだ。いいかね、微塵もだ」

語気荒く言い切った汪だったが、頭にはウルゼルやフィーの顔がちらついていた。自分はエトガルを羨<sup>うらや</sup>んでいるのだと初めて気づく。エトガルの指摘は正しいのかもしれない。

汪は咳払いをした。

「——急なことで、二つ返事に乗れる話でもないだろう。君は慎重に事を進めるタイプだからな。考えておいてくれ。もっとも、何日も残されてはいないだろうがね。金星也元帥はやると決めたら容赦<sup>ようしや</sup>がない」

「私も、やるときはやります。そのくらいの意気地はついた……」

エトガルは渋面のまま車を出す。何に重点を置いているかはわからないが、今の会話をもとに深く考え込んでいることは明らかだった。

汪を病院で待ち受けていたのは、基幹部隊に属する医師ではなかった。エトガルがアポ無しで訪れたために、他の重要な患者の対応と重なってしまい、結局、別の医師が汪の診察に当たったのだった。しかし、目当ての医師が腕を保証する名医だと、エトガルは説明する。おそらく、その代打の医師自身の受け売りだろうと汪は察した。

「急に意識を失う、平衡感覚が狂いがち、食欲不振。その他の自覚症状は？」

問診を進めるその医師は、国籍不詳の顔つきの男性だったが、白衣には名前らしき漢字が刺繍してあり、東アジアにルーツを持つ者だとわかる。

「<sup>ファン</sup>篁先生。あなたは軍人ではないですか？ 亜細亜連邦軍の」

唐突に問診を遮られた医師は、あからさまに態度を硬化させた。

「聴力と言語認知の検査が必要だな。質問をしているのは俺のほうだ。聞かれてもいないことをだらだらと話すんじゃない。こちらは時間がない」

確かに、汪は待合室の多数の患者をすっ飛ばしてこの診察室へ入った。基幹部隊というのはなるほど確かに一目置かれる存在のようである。若きエトガルであっても、その箔が有効に作用するのだから。

目に光を当てたり、膝を叩いたりといった検査のあと、医師はメモ用紙をちぎって、ボールペンとともに汪に渡した。

「自分の名前を書いてくれ」

「サインなら色紙か蔵書に……」

「黙ってやれ。あと十秒」

医師が真面目に時計を<sup>にら</sup>睨み始めたので、汪も慌ててサインした。すると、医師はもう時計から目を離しており、汪の手元を注視していた。

「変わった書き順だな。アルファベットの筆記体のようだ。昔からそう書くのかね？」

「サインとは個性を出すものだ。特に、このサインはあなたへの敬意を込めて、今日初めて披露したものだ。大事にしてほしい」

言い繕ったが、書き順を誤ったのは事実だった。幼少の頃からしたことのないミスだった。やはり脳の機能が一部正常ではないのかもしれない。

汪は傍らに控えるエトガルを見た。

「時空転移は果たして完全な転写と言えるか。私はその調査を受けているのだな？」

「誤解です。ベルリンではすでに統計的なデータが得られているはずです。汪大尉をサンプルに含める緊急性は高くありません」

「しかし、私は啓示軍の制御下で転移したのではない。それは、君たちが持っている症例データとは決定的に異なる部分だ。私の転移は完璧だったか、という問いに変えてもいい」

「モスクワ上空に出現したのは、いくぶん失敗だったと見做さざるを得ないでしょうね」

汪は医師に視線を戻す。特に驚いたり、冗談と捉えている様子はない。

「やはり覚えていないようだ」医師は言う。「あのとき、上空からの<sup>ちんにゆう</sup>闖入者を洗いざらい検査したのは俺だ。君は意識が朦朧<sup>もろうろう</sup>としていたが、私は幸い、酔っていなかった。状況は承知している」

「篁先生。カルテのコピーがほしい。亜細亜連邦軍には私のデータがある。突き合わせれば何か判

るかもしれない」

「連合軍が病院を焼き払う前に、か」

「そうならないようにエトガル君が頑張っている。私は、私のことをよく知っておきたいだけだ」

「それなら、もうひとつ検査をしたあとでいくらでも複写するがいい。装置の準備がある。一時間ほどよそで待っていなさい」

医師は看護師を呼びつけて二、三、指示をする。エトガルが心得た様子で退出していくなか、汪はまだなにか聞き出そうかと様子を窺っていた。しかし、別の看護師が二人やってきて、押し出されてしまった。

先に廊下に出ていたエトガルは、穏やかなまなざしで、しかし唇は固く結んで、窓から外を見ていた。歩み寄ると、彼の視線の先には、階下の緑地でリハビリに勤しむ老人や傷痍軍人の姿があった。あのなかにも、モスクワ防衛に参加した垂細亜連邦軍の将兵がいるに違いない。それは慈善なのか、データサンプリングなのか、あるいは、恭順を促すための施策であるのか。——その全てかもしれないと汪は思った。人の行為は、それほど明確に機序を説明できるものではない。ましてや組織の決定は、最大公約数的なものに収束していきがちだ。啓示軍は異なるのかもしれないが……。

「エトガル。君は統計的データは足りていると言っていたな。ベルリンに時空転移後の症例を照会しなかったというのは、嘘だろう」

「——はい」

「データから得られたその結論は？」

その問いに、エトガルはすぐには答えなかった。汪は自分の手を握ったり開いたりして、返事を待つ。こうして動かすぶんには支障ないように感じるが、しかし、自覚のない変化というものはある。暖炉の谷からこちら、それを散々見てきたのだから、その手が震え出さないよう心を鎮めるのには労力が要った。

「——部分的な記憶の欠落、神経の鈍化は統計的に有意でした。しかし、影響度は特に生活に支障をきたす程度ではありません。染色体など遺伝的な影響は認められていません」

「それは、時空跳躍の回数に対する依存性を調べたのかね」

「いえ。残念ながら、我々の理論を以てしても、時空転移はなお制約の多い技術なのです。つまり、複数の転移を重ねた者は多くありません。個々のケースの状況も異なり、統計的な処理には見合いません」

「それではやはり、私は貴重なサンプルに入るといわけだな。短時間で二度の時空転移を経た私は」

「あなたは貴重な人材です。サンプルではない」

「ともに、敬い合う関係でいたいものだ。これからも」

車中の話を示唆しつつも、エトガルとは目を合わせず、汪は逆に反対の廊下を見やった。

そして、凍りついた。

誰かが見ている。汪をめがけて、近寄ってくる。大柄の男だが、体が不自由らしく、手すりを伝ってのゆっくりとした歩みである。顔の半分以上が包帯に覆われていて、人相はわからない。し

かし、興奮しているのは明らかだった。

エトガルも異変に気づいた。汪ではない誰かに向かってぼそぼそ言っている。どうやらカスパルか、その仲間が近くに張り込んでいるらしい。その意図を詮索する気は今の汪にはなく、距離を詰めてくる謎の男の存在に、一步も動けないでいた。

苦しくなって息を吐く。呼吸が止まっていたのだ。めまいが始まる。

「大……尉！ 大尉だ！ 懐か、し、な」

獣のような声で男が叫んだ。声帯を損傷しているのだと、汪は察した。包帯の合間から見える男の表皮には痛々しい傷が刻まれている。戦争のためか、バロググのもたらした不幸な事故のためか、あるいは迫害か。情報が不足しわからないが、男は汪を知っているようだった。それでも、汪には思い当たる節がない。いや、思い出せない。思考が進まない。

「——セルゲイ」

近くで誰かがその名を口にした。誰かと確かめるために首を巡らせることも、もう汪にはできなかった。地下鉄で脱走を図ったときと同じだった。

景色が白い霧もやに覆われていく。溺れるように汪凱威は意識を失った。

## 7

——汪。汪凱威。

誰かが呼んでいる。誰の名前だろうか。

——おまえだ、おまえ。起きろ。死なれては困る。生存本能を発揮しろ。

言われるまでもない、という反骨心で汪は目を覚ました。

「……と伝えておけ。状況は……。わかった、これはなかなか重症だ」

フアン  
篁 医師の声がする。

汪はゆっくりと目を開き、そこが病院の廊下であることを知る。汪が横たわっているのは椅子ですらなく、床である。そして倒れているのは汪ばかりではなかった。病衣の老若男女、そして医師や看護師たちまでもが、数人に一人の割合で床に転がっている。

篁医師は一带のトリアージを終えたところなのか、周囲の人間に指示を出していたようだった。溜め息とともにふりかえり、はじめて汪の目が開いていることに気づく。

「目が覚めたか」

「そうらしい」

汪は自力で体を起こす。制御は可能なようだが、視界は晴れない。白い霧のかかったままだ。

——これは、バロググだ。

汪は直感した。根拠に思いを馳せるよりも早く、まずは耳を澄ます。窓ガラスが小刻みに揺れている。遠雷のような轟きは、砲弾やミサイルが飛び交い、ビルが倒壊する音だ。戦闘が始まったのだ。

近くにエトガルの姿はない。包帯の男も。腕時計を確認すると、数十分間、気を失っていたとわかる。

「何が起きたんだ、いったい」

「エトガル・ローゼンは間に合わなかった。連合軍が攻撃を仕掛けてきた。可視光遮蔽性のバロログが出てから、間もなくのことだった。偶然と考えるのは愚鈍だろうよ」

「先生、あなたもなかなか賢いようだ。そう、<sup>キム</sup>金元帥ならやりかねない。想定すべきだった」

冷徹な<sup>ソシヤ</sup>金星也にとって、モスクワは郷愁や<sup>れんびん</sup>憐憫の対象ではなく、文化の保護といった思想も持ち合わせないだろう。ましてや、元来のモスクワ市民の安否など。しかし、他のロシア市民はもちろん、前線の将兵も、モスクワごと<sup>オフェンバーレナ</sup>啓示軍を蹂躪しろという命令には積極的に従えないだろう。懲罰を恐れて命令には従わざるを得ないとしても、その効率は極端に低下するはずだ。そんな無駄を是とするような戦略軍総司令ではない。市街地攻撃を正当化するきっかけ、もしくは、市街地攻撃の経緯自体を隠蔽しやすい状況が生じるのを待ったのだ。一応まっとうな民主主義を保持しているアメリカ合衆国と<sup>くつわ</sup>轡を並べる意味でも、その配慮は必須だ。人情家ではないが、気配りを欠かさないのが金星也だ。目的達成のための最適な手段と判断すれば何でも喜んで——顔はせいぜい冷笑がいいところとして——実行する。大多数の他者に実行させるのだ。彼が築き上げた圧倒的権力で。そして、いわゆる高濃度の、つまりエネルギー変換確率密度が高いバロログが広域に展開したとなると、最初に動かす手駒は自明だ。

「機兵戦になる。私はエトガルのもとへ行かねばならない」

汪は医師の両肩を掴んだ。医師は<sup>ろうぜき</sup>狼藉に顔をしかめつつも、すぐには従わなかった。

「確認するが、亜細亜連邦軍のもとにはではなく？」

「くどいな、先生。エトガルにだ。私は約束を<sup>たが</sup>違える気はない！」

そこで拍手が起こった。フィーの浴びた喝采とは程遠い、ぞんざいな、たったひとりぶんの。

振り返ると、そこにはカスパルの姿があった。いつもの軍服姿ではなく、ヘルメットとジャケットを着用している。

「<sup>エーフュンフ</sup>E5 所属、カスパル・シュミット少尉。汪凱威同志を迎えに参上した」

拍手をやめた手が、窓の外を指し示す。そこには廊下の窓に寄せられた、エントゼルトゾルダートの顔があった。

汪はエントゼルトゾルダートの後部席に乗り、カスパルの操縦で、モスクワ市街を移動していた。バロログが可視光を散乱しているために、視程は二百メートルほどしかない。散乱の対象は当然電磁波の波長にも及び、通常の電波による通信はノイズとの戦いになる。とてもリアルタイム通信には向かない。得られる情報が少ないなかで、おのずと、二人での会話すなわち情報交換が生じていた。

「カスパルくんが機兵パイロットだとは知らなかった」

「そうかい。でも、俺の好きなデザートがチョコレートティラミスなことも知らなかっただろう。

フィーが寄る店には売っていないもんで、単独行動の用事がなければなかなか手に入らない」

「なるほど私はまだまだ君のこと、君たちのことを知らない。しかし、君が機兵パイロットでありながら私の監視や、フィーくんやエトガルくんの護衛のような任務をしていたことは、君の味覚に対するのはちょっと別次元の興味だな」

「不思議なことはないさ。俺は自分のアイデンティティを機兵パイロットだと思ったことはない。仕事で自動車のハンドルを握る人間は多い。俺も任務上必要なときにゾルダートに乗る。それだけだ」

「では、君を君たらしめているものとは？」

「おいおい、さすがに戦場で哲学を始めるつもりはないぜ。エトガルだって乗らないぞ、そんな話。——いや、最近じゃどうかな。あんたが来てからエトガルのバカに拍車がかかっている気がする。せっかく俺やウルゼルがこれまで浮き世に繋ぎ留めてきたっていうのにな」

批判されているのかもしれないが、汪はそれを聞いて悪い気がしなかった。情報をポジティブに捉えるもネガティブに捉えるも、受け手の専権事項である。ただし、情報が不足する中での判断は、少なからず後悔を伴うだろう。

エントゼルトゾルダートの外、モスクワ市街の現況について言えば、主要な交差点や建物を通過する際、そこに設置された BFG と通信中継機を通じて断片的に手に入っている。カスパルが先を急いでいるため、都度ゆっくり聞いてはられないが、散りばめられたピースから概況の推定は進んでいる。

攻撃はやはり連合軍によるもの。市民の多くはバログが出た時点の警報発令に従って特定避難所に避難しているが、さきほどの病院のように、体調不良を訴えて逃げ遅れている者も少なくない。モスクワの人口規模を考えれば、絶対数としてはかなりのものになる。

そんななかではあるが、連合軍は進攻を踏み止まってなどいない。バログ内での機動力に優れる機兵を主戦力として押し立て、モスクワ市街に電撃的に突入してきているとのことだった。連合軍が同士討ちを嫌ったためか、砲撃は頻度が下がり、距離も少し離れたようである。

『我、オズボーン・ワイルダー。敵機兵戦隊の分隊と会敵。殲滅する』

迎撃中の機兵戦隊からの中継音声もときどきキャッチできる。どうやら戦意はすこぶる高い。ワイルダー兄弟といえば、捕虜同然の汪に機兵からガンを飛ばしてきたやつばらだ。さもありません、と汪は納得した。

「啓示軍には戦うつもりがないとは、よく言ったものだ」

「あれは E12 だ。しょうがない」

カスパルは避難し遅れた市民がいなか注意して操縦していた。汪が何か言っても、返事が来るのは数回に一回。

街区ひとつを通り抜けると、地下鉄の入り口で、また中継点があった。

『——我、殲滅完了』

さきほどの声の男。

「おい、早いぞ」

「E12だからな」

「君は E5 と言ったな。E12 に加勢しなくていいのか」

「さっきも言ったが、ゾルダートでドンパチするのはワイルダー兄弟にでも任せておけばいい。俺にはもっと知的な任務がある。いや、俺達には、だな」

それは自分のことか、と戸惑った汪だったが、それは違ったようだった。すぐ近くに、もう一機

のエントゼルトゾルダートが現れていたのだ。汪は通信機のみならずセンサー類に、特に相対バルムンク反応には注意していたつもりだったが、目視レベルの距離まで察知できなかった。このような環境では、かなりの混戦になりそうである。

「サイラス」カスパルが友軍機に呼びかける。「汪大尉を連れてきた。フィーのほうは？」

『配置についた。おかげで各隊の士気は上がっているようだ』

「エトガルと、ウルゼルは？」

『もう <sup>ヴィヴィ</sup>VVの起動にかかっている。俺は次の作戦の準備に移る』

「了解。俺も十五分で合流する」

カスパルはその場の防衛を仲間に預け、例の工場へと向かう。と、その頭上で花火が上がった。いや、対地ロケット攻撃だ。汪は自機の対空機関砲が自動迎撃のため作動するのをモニタで見取った。フレームを伝って発砲音が尻に響く。その成果かどうかは判然としないが、続く爆発も頭上で起こった。

「冗談だろ。攻撃機だって？ このバログの中で！」

エトガルが <sup>いまいま</sup>忌々しげにモニタのひとつを凝視していた。はっきりと姿は見えないが、上空を熱源が通過したことは確かなようだ。ヘリの速度ではない。巡航ミサイルかもしれないと汪は思ったが、それがプログラムや地形認識で動く仕組みでないことは、すぐに明らかになった。別の地点から上がった複数の砲火を、その熱源は鳥のような身軽さでかわし、緩急のついた上下動、急旋回を披露しつつ、合間に小さな別の熱源を発射して、反撃している。

「Su-44だ！」

汪は叫んだ。

「知っているのか、汪大尉」

「Su-44、愛称“ルテナ”。変則領域探査機という扱いだが、実態は、機兵に与えられなかった空戦能力をカバーするための、変則領域対応の最新鋭多目的戦闘機といったところだ。君たちがさんざん蹴散らしてきた Su-42と同じと思うと痛い目を見るぞ。あれはバログ内をバルムンクフィールドと滑空でやり過ごす消極的な代物じゃない。まさしく戦士なのだ。まさかもう戦線投入が可能とは思わなかったが」

「俺はいま初めてあんたを凄いと思った。この状況でよく自慢話ができるもんだ」

カスパルが言い終わるかどうかのうちに、機体が急に横に跳んだ。直後、近くのビルが崩れる。見つかった。カスパルはうまく隠れていたと汪は思うが、相手は編隊を組んで突入してきたらしい。索敵システムをうまく操作できないが、二、三機はいるようである。

そして、何より悪いことに、やはり対地攻撃に <sup>ちゅうちよ</sup>躊躇がない。バログによる照準精度の低下は、爆発範囲の拡大でカバーできる。エントゼルトゾルダートの装甲では安心できない。

「これは厄介だ。サイラスに応援を頼むわけにもいかないしな……」

「E5の任務がなんだか知らないが、むざむざ討ち取られるわけにはいかない。私があつた Su-44のパイロットたちを説得しよう」

「馬鹿も休み休み言ってくれ。戦闘中にそんな怪しい声に耳を貸すかよ。だいいち、回線が開けない」

「外部スピーカがあるだろう」

「ジェットエンジンの音に勝てるかよ。——ん。この音」

回避運動と牽制射撃に専念していたカスパルが、ふとモニタのひとつを見て、にやりと笑った。コックピット内の鏡越しに汪と目を合わせる。

「助かったぜ。天使のご到着だ」

カスパルに言われるまでもなく、汪もまた気づいていた。製鉄所を鋼材が流れていくような音に。溶鉱炉のような輝きをその顔に湛えた、白銀の天使の到来に。

白い靄のなかを、きらびやかな一条の光が走る。それは今まさに地上施設へ攻撃を加えようとしていた Su-44 の翼を紙切れのように切り裂いた。よろめいた機体を続く第二撃が直撃。被弾した Su-44 はエンジンを片方カットして、滑空で戦線を離脱していく。

汪がそれに見とれている間に、ノイエトーターは白い靄のなかへ姿をくらませている。それが自分を助けたのと同じ機体であったかどうか、しかと姿を捉えて確かめることはかなわなかったが、それでも汪は、心が落ち着くのを自覚していた。

相対バルムンク反応センサーでノイエトーターを探る。上空に圧倒的な強度で輝点が示されているのがそれだ。残る Su-44 たちはそれを追って高度を上げていく。

「<sup>イクスツヴァイ</sup>X2 が敵を引きつけてくれた。今のうちに移動する」

カスパルは再び工場へと足を向ける。Su-44 の注意をそちらに向けないよう、<sup>あ</sup>敢えてその身を晒していたのだろう。おかげで、ヴィオレットヴィカールの待つ工場はどうやら無事のようにだが、近隣の複数の施設からは黒煙が上がっているようである。

ノイエトーターはバルムンク砲を地上に向けて撃たなかった。一方で、Su-44 は対地攻撃を<sup>いと</sup>厭わなかった。しかも、それはノイエトーターをおびき出すための、策として実施したことかもしれない。市民の犠牲を厭わなかったのだと、汪は勘繰れずにおれなかった。

## 8

<sup>ワン</sup>汪たちが格納庫に到着すると、そこにはもう整備中の機兵など残っておらず、整然としたままの通路を抜けてみれば、ただヴィオレットヴィカールが一機、<sup>ちよりつ</sup>佇立していた。つまり、すでに誰かが乗り込んで起動している。それはエトガルではない誰かだった。エトガルはヴィオレットヴィカールの足元で、測定装置の最新データが詰まったメディアを片端から集めて回っている。

「敵は目の前だぞ」エントゼルトゾルダートの喉元、すなわちコックピットハッチから頭を出して、汪は叫んだ。「データはまた取ればいい。今はヴィオレットヴィカールと君がここから避難することを最優先事項と置くべきだ」

「そういうわけにはいきません。ここで得られたデータは貴重です。そして、私だけがおめおめと逃げ出すわけにはいかない。仲間を守りたいのです。私が救われたように」

作業を止めない。頭上のヴィオレットヴィカールは、ただエトガルを待っているのではなく、すでに何かを始めているようだった。各所の送受信器が展開し、位置の調整を絶えず繰り返している。

「おい、カスパル君。まさか、エトガル君は今ここで呼びかけをやるというのか。それとも……」

「“ベルリンの壁”のはずはない。そういう計画ではなかったし、準備もない」

「そういうものか。では……」

「どうやら、エトガル坊やのやつ、悪いスイッチが入っちゃったようだ。しかし、ウルゼルが許可したのなら、まあ、やるしかないか」

そう言うカスパルは、案外、やぶさかでない様子である。汪はおや、と思った。

「惚れているのか？」

「俺が？ まさか。ただの腐れ縁さ。そして俺は任務を忠実にまっとうしようというだけだ。この計画の指揮官はウルゼルだ。俺たち E5 に関しちゃ、実際の指揮はサイラスがやってるが、いずれにせよウルゼルの意向で動いている」

「つまり、ウルゼル君はエトガル君の好きなようにやらせようと、そう言っているわけだな」

「聞いたわけじゃない。だが、そうなんだろう。わざわざ伝えなくてもたいがいのことはわかる」

「一方で、言わなくては伝わらない事実もある、か」

さきほどの Su-44 の振る舞い、亜細亜連邦の市民に伝われば、軍への批判が巻き起こるだろう。軍が治安維持を握っている以上、それは直接的に体制を打倒する力とはなりえないが、軍部を監督する中央議会には、民主的に選ばれた多くの議員たちがいる。すでに啓示軍<sup>オフエンバーレナ</sup>に占領された地域の出身議員たちは、選出過程<sup>よ</sup>に依らず、敵に回るだろう。軍にとってはやはり封殺したい事実なのだ。だからこのバログの発生を金星也は待った。

やがてエトガルの準備が完了し、一旦降着姿勢を取ったヴィオレットヴィカールが、その手にエトガルを迎え入れる。オルロフを通じた呼びかけは、端末さえ装着すれば、ウルゼルでも可能なはずだった。わざわざエトガルを収容するということは、あくまでエトガルの発話にこだわるためか、汪の進言を容れて退避を優先するためか。

汪はヘルメット内蔵の通信端末を操作して、ヴィオレットヴィカールと繋いだ。その操作はよみなくできた。

「ウルゼル君。君が指揮権を持っているそうだな。どうするつもりだね」

『オルロフとの通信が不安定さを増しています。予定外ですが、オルロフのところへ移動します。』

そこで SN 比を上げて接続するか、最悪、回収して次の機会に備えます』

「それがいいだろう。常に B プランは持っておくべきだ」

『しかし、この機体は目立ちます。ノイエトーターの部品を流用していますから、連合軍に誤認され集中攻撃に遭うおそれもあります。護衛を先に手配しました。じきに……』

「敵ならもう来たぞ！」

カスパルが機体を急反転させた。同時に、格納庫の壁が吹き飛び、あたりが粉塵にまみれる。身を乗り出しままの汪は危うくハッチの縁に肩を強打するところだったが、カスパルの着せてくれたプロテクタが守ってくれた。よくできた設計だと感心する。

埃を払って目を開けると、敵は正面にいた。カスパルがそう位置取りを変えたためだ。なにやら黄色い機兵が、格納庫の壁があった場所から半身を覗かせている。その姿は龍<sup>リオン</sup>ではなく、米軍が最近実戦投入した空挺機兵や重装甲機兵でもなく、ここのところよく見慣れたものだった。エントゼ

ルトゾルダート。しかし黄色いものは見たことがない。砂漠用の迷彩などではない、ビビッドな色だ。整備用の機体か、さもなくばファッションとしか思えない。そして色のほかに目立つポイントがもうひとつ、こちらは見慣れない、モンキーレンチのような左腕ユニットだ。ただの大型マニピュレータのように見えるが、壁が一瞬で吹き飛んだことからすると、爆弾なりロケット弾なりをどこかに内蔵しているのだろう。

「敵……なのか？」

「ひっこめ！」

カスパルに無理やり引き込まれ、頭上でハッチが閉じる。

『やあ、君たち！ 今のはひどい爆撃だったな。大丈夫か？』

通信機から能天気炸裂の声がした。聞き覚えはない。壁をぶち破っておいてこんな呼びかけをしてくる非常識な者など交友関係にはないのだから当然ではある。まるで目立ちたがりの小児のようだ。しかし、声が大人の男であることは明瞭だった。

『——お返事がないが、どうやら被害はないようだな。ところで、このへんにヴィオレットヴィカールというオシャレな試験機があるって、耳寄りな話をさっき聞いたんだ。君たちの動かしている機兵のどちらかが、それかい？』

「どこの部隊の者だ。戦闘中だぞ、不明瞭な言動は避けてもらいたい」

カスパルが応答する。黙殺するだろうという汪の予想に反していたが、ウルゼルがエトガルを回収して離脱するための、時間稼ぎだと気づく。一撃で倒せる確信がなければ、確かに、そのほうが妥当だろう。ただし、もちろん、カスパルは攻撃対象としてこの未確認機を上書き登録した。

『そっちの君が護衛だな。ということは……』

黄色いエントゼルトゾルダートがヴィオレットヴィカールに向き直る。その左腕のレンチが開かれていくのを見るが早いか、カスパルは警告なく射撃した。腕部機関砲。通常の機兵相手なら、数秒も当て続ければ装甲を貫通し、コックピットなり駆動系なり動力源なりを破壊し、無力化できるだろう。

五秒ほどの一点集中攻撃。避けることも退くこともなく運動エネルギーのつぶてを受け続けた標的は、しかし、健在だった。

『ワーオ。うっかり失禁するところだったぞ……。ひどいじゃないか、君。こちらは手を出していないのに。いや、手なら出したか……』

黄色のゾルダートは、盾のように構えていた左腕を動かし、<sup>いかく</sup>威嚇なのか動作確認なのか、レンチを幾度か開閉させる。

「ちっ。シュツツネーベルか」

『いえ、違う』ウルゼルからの通信。『動作は確認されていないし、音から判断して、ニーベルンガイトで単純に耐えただけ。そしてあの声、聞き覚えがある』

「やっぱりか。——顔を見せろ、エンリコ・フェルバルディ！」

カスパルの求めを待っていたかのように、ポップアップウインドウで見知らぬ男の顔が表示される。カスパルや汪のかぶるものと似た、しかし色がビビッドに黄色いヘルメットに、麻のような風合いの黄色いマフラー。ゴーグルを掛け、顔の下半分を密着して覆うマスクも身につけているが、

やはりこれらも黄色い。視界に映るものはすべて黄色だった。

『落ち着いてお話しできるように嬉しいよ。ただ、残念だが、君たちは人違いをしている。エンリコ・フェルバルディという男は死んだ。僕は黄色いマフラーのおじさんだ』

汪はエンリコ・フェルバルディという男を知らなかったが、この男が見え透いた大ぼらを吹いていることはよくわかった。あるいはかなり控えめか、でなければ色相環について強いこだわりを持ちマフラー以外の装身具を黄色呼ばわりされるのが我慢ならぬだけかもしれないが、いずれにせよ、その言動はこの場に似つかわしくない。そして、エントゼルトゾルダート同士が敵対するというこの状況自体が、汪には理解不能だった。垂細垂連邦軍の鹵獲機というわけでもあるまい。パイロットはカスパルたちの知り合いなのだ。

「あんたが撤退戦でフェアバンテと交戦したことはわかっている。サルバ・ラディールは無事帰還したからな。燃料気化爆弾で吹っ飛んだか、もしくは、という話だったが……。虜囚となるにとどまらず、まさか自ら我々に背く道を選ぼうとはな」

『人違いだと言っているじゃないか』

「わかった、わかった。改名したならその意志は尊重しよう。黄色いマフラーのおじさんよ」

『よろしい。物分りが良いついでに、ヴィオレットヴィカールを引き渡してもらおうか』

「どういう理屈だ」

『危険な玩具を没収しようというだけのことさ。なに、大丈夫。いざ手放せば、それが不要であったばかりか、害悪ですらあったことが自ずと見えてくるだろう』

「だから、どういう意味だ。とても相手を説得しようという態度じゃないぞ」

『それは、そのように感じるよう、君たちが操作を受けているからだ』

黄色い変態の言葉に、汪はどきりとした。それは汪がエトガルやカスパルにいつか言わねばならないと考えていたことと一致していた。しかし、汪は彼らに自覚があるのかをまず探ることを優先してきた。迂闊にその考えを持ち出して警戒され、今の立場を失うことを恐れていたのだ。それを今、この闖入者が、言ってしまった。冷や汗が出るかと思っただが、体が思考についていけないのか、発汗の変化は感じられない。

『ハンス・ライルスキーの軛を受けている君たちには、自分たちのほかはすべてが敵か、あるいは諸国の政府に騙されている哀れな者たちだという、無意識の感覚がある。だから、戦って打ち負かすか、保護下に置くかという発想になる。僕が発したとおりの言葉を君たちが頭の中で再生しているのかすら、僕には確証がない』

「大丈夫だ、聞こえている。少なくとも意味不明な獣の唸り声とは思っていない。だが、そんな与太話を吹き込まれてまんまと転向したのだとすれば、エンリコ・フェルバルディ、あんたは獣でなくても子供だよ。フェアバンテが……ヴォルフガングやヴァルターがそんなに格好良かったか。あれこそ完全なテロリストだ。今ここで投降するなら、基幹部隊にゆっくり教化を受ける機会を与えてやるよ。——決心がつかないというなら、力づくで引きずり出すまでだが」

カスパルは苛立っていた。声の上ずりでそれは明らかだった。反駁しながらも、静かに指を動かして武装設定を機関砲から別のなにかに変更している。

『ははあん、君はシュミット家の……。身内ゆえの愛憎というわけだね。そうした生の感情を残し

ていることは素晴らしい。実に、素晴らしい！ わざわざ軛を受け続けることはない、早く君もこっちへ来るといい。君の親戚たちが待っているぞ。もちろん僕も歓迎する』

「だが断る」

『なるほど。聞き分けの悪い子にはお仕置きが必要だな』

黄色いマフラーのおじさんが、覆面の奥で笑ったようだった。直後、乗機が急に前へ動き出し、汪は再びヘルメットをぶつける。動いたのは黄色いゾルダートも同じだった。モニタに映るその姿が見る見るうちに大きくなる。レンチが迫る。

二機が衝突した。カスパルのエントゼルトゾルダートの腕には、トンファーのような殴打用武装が展開されており、それが黄色いレンチを受け止めている。互いのアクチュエータが唸りを上げている。多少姿は違っても同じエントゼルトゾルダート、駆動系の出力は互角のようだった。となると、汪には次の争点が理解できる。どちらの得物が先に強度限界を迎えるか。もしくは残バッテリー量が勝敗を決めるか。

結果はすぐに明らかになった。組み合った状態のままレンチを締め上げた黄色いゾルダートが、カスパル機のトンファーを根本からへし折った。

『このゲルプクラゲンすごいよ！ さすがフェアバンテの改造機！』

「ほざけ！」

カスパルはこの時を待っていたらしかった。破損した腕を切り離し、相手との距離を数歩詰める。もうレンチの間合いではない。残る片腕に装備された機関砲が、相手の腰部に狙いを付けている。

巨大なネジの箱をひっくり返したような音が工場に響き渡る。

今度は手応えがあった。黄色いゾルダートは文字通りの腰砕けになって尻もちをつき、カスパル機もたたらを踏んだが、近くの工作機械に体を預けて転倒を免れた。

カスパルは息つくことなく、さらに機関砲の狙いを定め直し、レンチ型の腕部を懸架している肩部分にレティクルを合わせる。ただし、指示を受けた機体が実際に砲身の軸を安定させるのに、それから数秒を要した。

『下がるんだ、カスパル！』

エトガルの声がした。汪が危険に気づいたとき、カスパルはもう対応に移っていたが、片腕をパージしたエントゼルトゾルダートの追従性は低下していた。黄色いゾルダートが放り上げた数十センチ大の物体が、モニタの視野内で爆発する。

反射的に顔を背けた汪だったが、痛みや熱は襲ってこなかった。さりとて不発でもなかった。煙幕を張られたのだ。モニタ自体は電子的に生きているが、何も見えない。他方、音はよく聞こえてくる。緩衝層を備える機兵の歩行音とは異なる、耳障りな金属擦過音が鳴り響き、そして遠ざかっていく。

『残念だが時間切れみたいだ！ また会おう、諸君』 エンリコ・フェルバルディと呼ばれた男の声。『ただ、最後にひとつ忠告させてくれ。できればそのヴィオレットヴィカールと、市内のあちらこちらの砂時計は、叩き壊したほうがいい。そのほうが幸せになれる』

「逃がすかよ」

カスパルはさらに聞き取れない罵詈雑言<sup>ばりそうごん</sup>を吐き捨てながら、煙幕のなかに飛び込もうとしたが、その機体の動きはさらに高い駆動力によって制止された。モニタに白い羽のようなものが映る。そこにはすみれ色の筋が入っている。

「離せ、エトガル。俺は奴を捕えて、今度こそフェアバンテのアジトを割る必要がある」

『冷静になれ、カスパル。奴はニーベルンガイトの装甲と、レプリカだと思うが、背部にマスティレクタらしきものを備えていた。他に隠しているのが爆弾だけという保証はない。それに、パロッグは今、連合軍を利している。引き際だ』

『私からも要請する』と、ウルゼル。『応援を待つ余裕は無い。今すぐ移動したいのだけれど、護衛はまだ可能？』

「なめるなよ。俺を誰だと思っている。——すまない、頭は冷えた。俺の個人的事情で汪大尉を連れ回すわけにもいかないしな」

鏡越しに、同乗者と目が合った。

「理解してもらえて嬉しい。今の敵と、そして過去に何があったかは、道々聞かせてもらおう」

汪は、悪態が飛んでくることも想定していたが、カスパルは黙って頷いた。

## 9

ヴィオレットヴィカールとエントゼルトゾルダート、二機の複座機に分乗した四人は、途中でカスパルの同僚、E5のアウジリオが操縦するエントゼルトゾルダートを護衛に加え、クレムリンの城壁をくぐった。そこがウルゼルの示した目的地だった。

城壁には損傷と火災の跡が見受けられたが、それは昨年の戦いによるものらしく、応急的な修復や安全に関わる表示もまた確認できた。さきほど連合軍が投射した火力は、このクレムリンを標的にはしていなかったようだった。

そのことに気づいたものか、城壁の内側には難を逃れて集まった多数の市民の姿があった。啓示軍の将兵がてきぱきと彼らの誘導と防護を進めている様子も見える。

時計塔の下まで移動したところで、五人は機兵から降りて集合した。

「こんな人気の多いところにオルロフを隠していたとは」

汪<sup>ワン</sup>が率直な感想を述べると、カスパルが慌てて汪の腕を引っ張った。

「勘弁してくれ、汪大尉。声が大きいぞ」

「はて？　ここは啓示軍<sup>オフエンバーレナ</sup>が接収しているのだろう。友軍のど真ん中ではないか」

「俺たちの任務はウルゼルの……基幹部隊の指示に基づくものだ。その内容は不用意に漏らしているものじゃない」

「存外に、秘密主義なのだ。亜細亜連邦やアメリカ合衆国を笑えないのではないか」

「秘密は必要悪だ。問題なのは気持ちだよ。俺たちはどの情報を知らせ、どの情報を伏せるかによって、人々の幸福を最大化したいだけだ……」

カスパルがそこで言い淀むと、ウルゼルが後を継いだ。

「やや齟齬<sup>そご</sup>もありますが、カスパルは大意を外していません。オルロフについて適切な学習段階を

経ていない人々が、不用意にオルロフと触れてしまうことは、少なからぬ危険を招きます。その意味は汪大尉がよくご存知でしょう」

汪は頷かざるを得なかった。身をもって、それは知っている。モズの早贄よろしく、時計塔の先端に突き刺さっていたかもしれないのだ。

「オルロフはこのスパスカヤ塔の中に保管されています。大きさは三メートルほどですが、この状況では、外壁を破って取り出すしか無いでしょう」

平時であればなかなか過激な発言だが、一同、誰も意外そうな顔はしなかった。手段を選ぶほどの猶予がないことは共通認識となっていた。

守備に就いている部隊との情報交換と、戦場を行き来していたアウジリオの報告とを突き合わせた結果、啓示軍の防衛線が各所で分断されたことが判明していた。空路では Su-44 のみならず米軍の空挺機兵が、陸路では先程の黄色いゾルダートの他に龍の少数部隊が突入してきている。啓示軍側も、カスパルやエトガルの知る以上のエスカドロンをモスクワの防衛に配置していたようだが、それとて連合軍の**かせい**の進撃を押し止めるには**がぜん**物量が不足していた。汪は、もともとモスクワを防衛する気がなかったというエトガルの説明には、やはり一定の理があったと思った。「このぶんでは、半時も持たないだろう。壁をお行儀よく掘ったんじゃ時間が足りないぜ」

アウジリオは自機に装備した削岩機を見やったのち、ウルゼルを振り返る。ウルゼルが実質的な指揮官だと言ったカスパルの言葉は誇張でも何でもなかったようだ。実際、ウルゼルは何らの動揺も気後れも見せずに堂々とアウジリオを見返した。

「それほど待つ必要はないわ。すぐに **イクスツヴァイ** X2 が来てくれる」

「そうかな。あいつ、空戦の経験が少ないからな……。Su-44 とやらや、米軍の新型機兵まで **がんくび** 雁首揃えて来るとは予想外だったとしても、せめてもっと戦闘経験のあるドライバは使えなかったのか」

「現時点で最適のドライバよ。他に選択肢はない」

「そうだ、現時点では、だ」エトガルが語気を強めて割り込んだ。「**ヴィヴィ** VV がオルロフとの双方向通信を確立すれば、Xフレームの任務の一部を代行可能になる。そうなれば、ドライバの適性要件だって変わってくる。ひとりに負荷を集中する必要はなくなるんだ」

「そのためにもまずはオルロフの回収だ。それまでは頑張ってもらうしかない。同情したところで、俺たちが替わるわけではないんだからな」

苦々しげにカスパルが言って、しばし沈黙が訪れる。

汪は五人の会話を咀嚼しきれない部分があった。ただ、機兵に乗ったままでの通信を避け、敵襲の可能性を否定しきれないこの状況で敢えて全員が顔を合わせて会議しているのは、それが友軍にも明かせない機密に属することだからというのは理に適っている。クレムリン付近では BFG の設置密度が濃いようで、バロッグの電波障害は緩和されている。機兵間の **ひとく** 秘匿通信も可能と思われるが、ログに残ることすら **はばか** 憚っているのだろう。

ヴィオレットヴィカールは、すぐに乗り込めるようコックピットハッチを開放した状態で脇に控えている。カスパルとアウジリオのゾルダートも同様だったが、汪は今度はヴィオレットヴィカールのほうへ乗ることが決まっていた。護衛の二機はまた激しい戦闘機動を行うことになる。ヴィオレットヴィカールは極力戦闘を避け、隠れたり全力噴射で離脱することになるため、小刻みに反転

する加速度と闘う必要がなく、非戦闘員である汪がその後部席に乗ることが安全という結論に至ったのだ。ウルゼルもエトガルも戦闘訓練を含む一連の機兵操縦をレクチャーされている、とのことだ。

X2、すなわちノイエトーターの二号機を待ち、それからこの時計塔に埋まっているオルロフを回収して、市の北西部へ抜ける。ここでは先発した<sup>エーフェンフ</sup>E5の仲間が退路を確保してくれており、他の啓示軍部隊に先んじて、汪たちは連合軍の攻撃から逃れられることになる。——脱出の行程は大筋、汪も把握している。解せないのは、啓示軍の武力の象徴たるノイエトーターに対して、彼らの言い様が、子供でも扱うように聞こえることだった。相当の若手がパイロット——彼らの呼び方によればドライバー——であるのかもしれない。

汪は思い出すことがあった。暖炉の谷で暴走した<sup>ロンワン</sup>龍王肆番機のパイロットは、実は、まだ汪の半分も生きていない子供だった。当時、自身も負傷して朦朧状態だったために委細は知らないが、数名の目撃者の話を伝え聞いているし、<sup>キムソンヤ</sup>金星也元帥の威光をちらつかせて<sup>スミッツ</sup>SMITSからも情報は得ている。どうやら龍王は一種のブレインマシンインターフェースを用いており、その適性は成長途上の十代のほうが期待値が高いとの由縁があるらしい。SMITSが軍に預けず運用し続けている<sup>ろく</sup>陸番機も、<sup>いおろいおり</sup>五百歳惟織なる少女が乗っていた。

ノイエトーターもそうなのだとすれば、こちらも、人の脳を操縦系の一部として利用するシステムだという推論が可能である。傍証は他にもある。これから汪が乗ろうかというヴィオレットヴィカールだ。これもノイエトーターを参考にし、部材の流用もして、作られている。つまり、もともとノイエトーター用に完成したブレインマシンインターフェースがあり、それを移植できたからこそ、オルロフとの相互通信試験が短期間で可能になった。そう考えるほうがいろいろと辻褄は合うのだ。

しかし、若年者のほうがブレインマシンインターフェースの適合性が高いとすれば、ひとつの疑問が残る。なぜ、ヴィオレットヴィカールを若年者に使わせないか。機密の問題はもちろんあるだろう。しかし、汪はすでに、エトガルらの計画に関してかなり首を突っ込んでいる少女、もとい、少年を知っている。フィーだ。フェリクス・セラフィモフ。

——そうだ。答えは目前に提示されていたのだ。

リードの狂った金管楽器のような響きが空を覆う。白銀の天使、X2の見えない翼の羽ばたきだ。命を救われたとき、今と同じく壁ひとつ隔てずこれを聞いた汪は、この飛行音を耳障りだと感じていたはずだった。たった数日後の今日、それを心地よく感じる感性が芽生えている。そして、それは汪だけに訪れた変化ではないのだろう。群衆の歓声が城壁のなかで反響し、熱気が高まっていく。

「軛か……」汪は呟く。「私は、すでにハンス・ライルスキーに操られてしまっているらしい」

「何を言い出すのです、汪大尉」

霧に包まれた空を見上げていたエトガルが、ぎょっとした様子で汪を見つめる。

「黄色いマフラーの紳士も言っていただろう。君たちは、いや、私たちは、ハンス・ライルスキーの軛を受けていると。そうと悟ることなく……」

「大尉殿、あれは叛逆者のアジテーションだ。根も葉もないことだ」

「そうかな、カスパル君。私は地下鉄で見た砂時計型の BFG をよく覚えているぞ。あれは確かに、このようなバロッグにあっても電気と通信を確保してくれる、生命線かもしれない。しかし、そのネットワークは、どこまで繋がっている？ オルロフは思念による遠隔通信を行う未知のシステムだというのが、私やエトガルの導き出した結論だ。しかし、ハンス・ライルスキーにとっても、それは新しい解釈だったという証拠があるかね？ 確かめるすべはない。すべては憶測だ。だがそれでも、私は不安を拭いきれない。この私の思考が、感性が、高揚と消沈とが、変則領域により伝播された信号によって私の体内に惹起したものではないかという不安をだ。私はオルロフを媒介とする新しい通信技術をものにしたと思った。しかし、それはすでに啓示軍が手にしていた技術の再発見であり、私は、コペルニクスに過ぎなかったのかもしれないのだ……」

どう反駁すべきか、もしくは宥めるべきか思案顔の若者たちの横で、やや年嵩<sup>としかさ</sup>のアウジリオが耳を指さしていた。

「あんたの述懐はあとで聞こう。来てるぜ、敵が」

一同、耳を澄ますが、汪には遠方の戦闘音の区別がつかない。頭上には X2 も降りてきているし、群衆の歓声も収まっていない。カスパルは自分の耳よりアウジリオを信じたらしく、すでにゾルダートに向かって駆け出している。ウルゼルは身につけていた小型の通信機で X2 に指示を出していた。

「X2。時計塔の側面、私たちの立っている側の、地上十メートル位置をターゲット。グングニルの熱粒子砲モード、収束度四で撃って！ 一発でいい。敵が……、たぶん龍<sup>ロン</sup>が三機ね、すぐ近くに來ている。エネルギーは温存して」

『了解。離れてね！』

それは紛れもなくフィーの声だった。汪の仮説は当たっていたのだ。

ついに濃霧のなかから白銀の輝きが姿を現し、携えた槍、グングニルの先端が仄かに光った。つい見とれてしまった汪は、エトガルに突き飛ばされて地面に転げたことで、かろうじて瓦礫と衝撃から逃れることができた。

「早く、VVへ」

エトガルが、汪の手を引いて走る。ウルゼルとアウジリオの姿は、立ち込める粉塵の中で見つけられなかった。時計塔に穿たれた穴<sup>うが</sup>へと向かったのかもしれない。そこにオルロフが眠っていたのなら、そうだ。

ふたりが乗り込むより早く、敵の攻撃は始まっていた。城壁が砲撃、もしくは爆撃を受けている。新たな土煙と地鳴りが起こり、炸裂した破片のいくつかがゾルダートの装甲を叩く音がする。汪のヘルメットを上から叩いたのは、巻き上げられた砂利か。

「狙いは X2 のはず。守備隊もいます。私たちがウルゼルの回収を支援しましょう」

汪に否はなかった。もとより戦闘のプロではないし、ヴィオレットヴィカールもそうだ。アイドリングしていたヴィオレットヴィカールはすぐに立ち上がり、穴のほうへ向かう。

ノイエーターとカスパル機はすでに城壁の外へ踊り出て、敵機を迎え撃っていた。適切な判断だと汪は評価した。おかげしばらくの間、龍のパイロットたちはこちらの存在に気づかないだろう。濃霧によるこの視程と電波散逸環境下にあっては、相対バルムンク反応が最も信頼性のあるセ

ンサーとなるが、ノイエーターほどの強烈な反応があれば、爪を隠したヴィオレットヴィカールの反応は埋もれてしまう。城壁も各種電磁波のスクリーンとなってくれる。

アウジリオがゾルダートの腕についた削岩機で穴を広げる作業をしていた。近くにはウルゼルが生身で立ち、都度、アウジリオに指示をしていたが、ヴィオレットヴィカールを認めて回線を切り替えてきた。

『想定外の事態よ。オルロフの成長が加速している……。もう少し広げないと取り出せない』

「オルロフの成長だって？ ウルゼル君、それは初耳だぞ。なあ、エトガル……」

「いや、想定すべきだったんだ」エトガルは左手のグローブ越しに顔を押しさえ、震えていた。「このバロッグの発生を引き金として……。いや、違う。オルロフの成長こそがバロッグの発生をもたらしたんだ。端緒となったのは、たぶん、私たちがVVでオルロフを操作することに成功したからだ。因果応報なんだ。求めに応じて、オルロフは姿を変えようとしている……」

『それは、アルベルトの想定にもなかったことよ』

「しかし、僕は予測しておくべきだった！ こうなるとわかっていれば、アルベルト様に計画を元に戻すよう進言もできたのに」

「エトガル君、なんだね、その計画というのは」

汪は訊きながら、しかし、おおよその検討はついていた。エトガルの言とモスクワの実態の乖離、それが最も明白だったのは、啓示軍がモスクワを守備し連合軍を押し返す布陣で臨んでいた点だ。戦略目標を達したのでいつ撤退しても構わないというエトガルの説明では、数個エスカドロンが防戦に出ていることが説明できない。X2すら派遣される必要はなかった。

「その通りです」

エトガルが言った。

「私は、まだ何も言っていないが」

「すべて聞こえているのです。我々の脳に。オルロフが伝えているのです」

エトガルは側面のコンソールを押しつけ、上体をひねって、汪を直接、瞳で捉えた。

「汪大尉。あなたがモスクワ上空に現れたとき、整然と回っていた歯車が静かに狂い始めたのです。あなたは明らかに、時空回廊を通して来た。その出発点は横浜。我らの同志が＜崑崙＞の召喚を試みた作戦との関連は明らかでした。しかし、予期せぬことも起こっていました。フィーに回収され、検査と聴取のため運び込まれたあなたは、錯乱しながらも、言語ではない方法で思考を伝達していた。自らはそうと悟らぬうちに」

「なんだって」

「あなたは英語か、母語を喋っていたつもりでしょう。翌日以降、あなたの意識が落ち着いた段階では、それは我々にとっての現実と基本的に整合していましたが、それでも興奮時など、ときおりあなたは意味が取れない音声を発していた。そして驚くべきことに、そんなときにでも、我々は会話が成立していた。あなたの発言の意味が認識でき、そして、我々がドイツ語や英語で行った返答を、あなたはことごとく、即座に理解した」

「オルロフはコミュニケーター……」

今度は汪が頭を抱える番だった。わかったつもりになっていた事象を、改めて見つめ直す必要に

迫られていた。

「我々が実験に使っていたオルロフは、あなたの出現を機に活性化されました。それまで不首尾続きだったVVでの試験が、にわかに進展を始め、そしてあなたの知見を得たことで大きく飛躍した。あなたは二重に、このヴィオレットヴィカールとオルロフとの通信確立に貢献なされたのです。しかし一方で、私たちは根本的な敗北感をも味わっていました。あなた自身は、VVという道具を使うまでもなく、オルロフを介して思惟の転送を行っているのですから！」

「そんなはずはない。私にそのような能力はなかった。そんな化物はケーニヒの一派くらいしか……。いや、あのとき江藤少佐は穂積<sup>ほづみ</sup>と交信していたようだった。あるいはかの御仁も……」

「その、江藤少佐という人物は、今どこにいますか」

「知らない。私が訊きたいくらいだ。同じモスクワに飛ばされていてもおかしくないが、あるいは今攻め込んでいる部隊に、混ざっているのかもしれないな」

「あくまでそのような認識なのですね。——いいでしょう。バルトリーニ中尉、取り出せそうですか」

『ちょうどご対面だ』

アウジリオ・バルトリーニのエントゼルトゾルダートが掘削をやめ、腕を城壁の奥へと突っ込んだ。そして数メートル大の塊を引きずり出す。塊の中央は琥珀色の輝きを呈していたが、その周囲は密集した茶色のつぶで覆われ、食べかけのチョコボールのようになっている。

「どうぞご覧下さい。あなたはこの現実と向き合うべきだ。そして、もう一度あなたが何者であるのかをお答えください」

エトガルが拡大してくれたモニタ画像の中央に、琥珀色の部分が大映しになる。中に人影がある。眠るような姿で閉じ込められているその姿は、汪がよく知っているものだった。

——あれは、私だ。汪凱威<sup>ガイウエイ</sup>だ。

——では、この私は？

改めてモニタに反射する自らの顔を見つめる。それは毎朝鏡の前で目を合わせてきた顔ではなかった。自分はこんな相貌<sup>そうぼう</sup>ではなかった。こんなに肉の詰まった体格でも、いかにも武官らしい粗野の極みのような口もしていなかった。

——この肉体は誰のものだ。私は誰だ。

琥珀色に重なった顔が、にやりと笑う。

<潮時か。苦労だったな、汪凱威。おかげでいろいろ試せた>

頭の中で声がする。このところ何度も聞いていた声。なぜ気が付かなかったのか。それが己の声ではなく、この姿が己のものでないことに。

<説明してやろう。それこそがオルロフの軛。ハンス・ライルスキーが配下と市民たちにかけている軛だ。よくわかっただろう、この軛は殆ど自覚されない。おまえが俺の体を借りていることに気が付かず、当たり前のように俺の体を己のものとして誤認していたように>

——そうか、あのオルロフの中に閉じ込められている、あれが私だ。時空転移の際に飲み込まれたのだ。黒龍隊が無事に複数の時空転移から生還したのは、なんらかのからくりがあったというわけだ。私はその恩恵<sup>あずか</sup>に与っていない。そしてあの神秘の琥珀に閉じ込められながら、すべての感

覚上の入出力を転送され、<sup>かりそめ</sup>仮初の肉体で出歩き、飲み食いし、排泄していたというわけだ。しかも、肉体にすりこまれた無意識的精神とマージしたかたちで。それならば合理的な説明が可能だ。私の度重なる意識の喪失は、私の肉体の欠損を示していたのではなく、本来の私との通信途絶を意味していたのだ。そして今、私の精神と肉体とが数十メートルの距離に近づき、明晰な頭脳が本来の輝きを取り戻しつつある！

<天狗の如きのぼせぶり、嫌いではない。だからこそ、もう少し俺を預けてもいいだろうと思ったのだ>

——どういう意味だ。

<俺の考えが伝わらないということは、やはり相互に同等の意思伝播が行われるシステムとなっていないらしいぞ、これは。まあ、細かい考察はおまえに任せる。おまえの考えたことは、圧縮されて俺の意識にも届く。俺の肉体はおまえのもの。おまえの思考は俺のもの。どこへいてもそれは変わらない>

——待て、江藤少佐。どこへ行く。私はどうなるのだ。

<壁の向こう側へ。心配するな。俺の精神が減びぬ限り、オルロフがおまえの精神と肉体とを保存し、接続し続けるだろう。そして、俺は滅びるつもりなど無い>

ずっと、江藤の気配が遠のく。入れ替わりに、体温、室温、呼吸、発汗、唾液、スピーカを通じて聞こえる戦場の音、コックピットのアラーム音や駆動音、エトガルの吐息に対する知覚が帰って来た。エトガルは汪へと問いかけた直後の姿である。江藤との<sup>かいこう</sup>邂逅は刹那の出来事だったのだと、汪は悟った。

——私は。

出そうと思った声が出ない。喉を動かそうという筋肉の動きが実現しない。驚きと焦りに息を呑むことも許されない。ただ呼吸は続いている。心拍が意識的でないように、生命活動は汪の意思に関わらず続いている。

不意に腕が動く。腰が浮き、前のめりになり、<sup>けげん</sup>怪訝な顔をしたエトガルの襟首を掴んで引き寄せた。悲鳴をあげる暇も与えず、何をされているのかの理解も許さぬうちに、エトガルをサイドモニタに叩きつけ、昏倒させる。

——何を、何をするんだ。私はこんなことを望んでいない！

江藤の答えはない。肉体は汪のコマンドを一切受け付けず、それでいて、アウトプットはすべて返してくる。汪は、友に対する暴力の手応えを現実のものとして知覚させられている。

ヴィオレットヴィカールの操縦の主導権が、後部席に移譲された。前部席乗員の意識喪失を感知した制御系が自動的に対処したのだ。汪はその仕様を知っていた。それが江藤に伝わったのだとすると、これまで汪がヴィオレットヴィカールについて検討したあらゆる技術的可能性を、江藤は選択肢として抱えていることになる。青ざめたかったが、もはや毛細血管の一本たりとも汪の支配下にない。

きびきびと操縦桿が<sup>かん</sup>操作され、ヴィオレットヴィカールの脚に装着していた、護身用の小型ヴェルメゼーベルが主兵装として選択される。そして敵味方識別装置の安全設定を解除。アウジリオ機に襲いかかった。

『おい、何事だ！ エトガル！』

オルロフに見とれていたのか、完全に意表を突かれたらしく、アウジリオの反応が鈍い。首と削岩機を切り落とされ、それでもオルロフを——汪の肉体を——取り落とすことなく擱座する。汪はよく知らないこの男のプロフェッショナルな行動、もしくは啓示軍の磨き上げた機兵の管制システムに感謝した。

ヴィオレットヴィカールはロケット噴射とともに跳躍した。すみれ色のバルムンクスタビライザをなびかせて時計塔の脇に舞い降り、眼下の戦闘を睥睨する。建物に隠れて弾倉交換中のカスパル機は、先に失った片腕以外に大きな損傷なし。ノイエトターは三機の龍が代わる代わり繰り出す剣戟の前に防戦一方。汪も見たことがないほどに龍の動きがいい。歴戦をくぐり抜けパイロットも機体も練度を上げた外廓聯に違いない。そして、同じものを見た江藤の肉体が、ほくそ笑む。

『……が動い……。X2……しろ、後退……』

目ざとくこちらを見つけたカスパルが、フィーに呼びかけながら援護射撃を行う。オルロフを無事回収し、撤退するものと、勘違いしたのだ。

——違うのだ、カスパル君。フィー君も。私から逃げろ！

念じてみても、オルロフがそれを伝えたという感覚はない。それでも、無意識に伝わっている可能性に一縷の望みを託し、汪は繰り返す。

——カスパル、フィー、逃げるんだ！

汪の思念を嘲笑うかのように、ヴィオレットヴィカールがふわりと舞台へと身を躍らせる。龍のうち一機がこちらへ気づき、注意喚起のためか、信号弾を発射した。これを受けて残りの龍も、フィーのX2も、ヴィオレットヴィカールの着地点を空けるように飛び退る。

彼らの状況把握のための沈黙は短かった。識別信号を見るまでもない。ヴィオレットヴィカールの外観はほぼトロイパペゾルダートであり、汪がそうであったように、色とスタビライザのシルエットによって見間違ふとしても、ノイエトターである。亜細亜連邦軍にとって撃破すべき標的であることに違いはない。

右に位置する龍が、両腕に装備した雷紫電を掲げ、不規則なステップを踏みつつ突進してくる。距離が詰まり、機体に描かれた部隊マークが見えた。赤龍隊。江藤博照の古巣。

「間合いが甘いわ！ 市来ィ！」

江藤の声が出る。そしてヴィオレットヴィカールが一步引いたかと思うと、視界が概ね水平に一回転。再び正面に龍を捉えたときには、雷紫電が二本とも跳ね上げられていた。汪には何が起きたかわからない。

「鄭、貴様もだっ！」

側方から迫っていた龍が、投擲された小型発熱刀を受けてひるむ。運動量が足りず、装甲を貫通しないのは自明だったが、そこへカスパルの援護射撃があり、二機目の龍は横飛びに離脱する。

次は最後の一機が来る。さきほどまでX2が受けていた波状攻撃を思えばそれは自明だった。

攻撃は頭上からだった。薙刀状の雷紫電甲型が大上段に振り下ろされる。汪は思わず目を背けそうになるが、江藤は決して視線を逸らさなかった。

運動量と電気ショックとが機体を襲う。しかし直撃ではなかった。雷紫電を雷紫電が受け止めて

いる。江藤は最初の龍から跳ね上げた雷紫電を拾っていたのだ。コネクタは合わないが、当然、絶縁仕様なので、防護壁にはなる。江藤がなかなか技術的な知見も活用して戦っていることに感心すら覚えたが、汪は気づいた。これは己の知識が掠め取られたのかも知れないと。

『エトガル、どいて！』

息を落ち着かせたノイエーターが助太刀に入った。虹色の軌跡が頭上を薙ぎ、龍が引き下がる。

フィーは、エトガルが気絶していることにも、江藤が体の主導権を取り戻したことにも、まだ気づいていないのだ。オルロフはそれを伝えていない。ヴィオレットヴィカールと肩を並べ、守るように、さらに一步前へ出る。

モニタの正面に、ノイエーターの最強の矛、グングニルの輝きがある。

ここぞとばかりに、江藤が動いた。興奮と一層の集中が、発汗その他の生理作用から汪にも共有される。

——何か、良くないことが起こる。

ヴィオレットヴィカールが雷紫電をおもむろに振り上げ、ノイエーターを背後から殴った。無防備だったノイエーターはよろめき、その隙に、グングニルを奪い取る。それは正常にヴィオレットヴィカールの兵装として認識され、砲口の輝きは消えることなく、むしろ輝きを増した。出力制限を解除したのだと汪は気づく。

グングニルの輝きは光刃となって固定され、それが膝をついたノイエーターの頭上に振り下ろされる。その瞬間、純白の霧が結界のように姿を現し、グングニルを受け止めた。

シュッツネーベル。戦車砲すら防ぐノイエーターの無形の盾。

江藤は驚いた様子もなく、グングニルをそのままぐりぐりとシュッツネーベルに押し付ける。シュッツネーベルがさらに広がり、見る見るうちに、ノイエーターの機体を覆い尽くす。その有様は繭、もしくは、“ベルリンの壁”の縮図。

汪は何かがわかりそうだった。

『こんなときに何の実験だ、エトガル！ いや、もしや……』

カスパルが敵の前に姿を晒す危険も顧みず、近寄って来た。来てはいけないと、汪は叫びたかった。

江藤が咆哮する。

光の奔流がどこからともなく湧き上がり、ヴィオレットヴィカールを、ノイエーターを、カスパルのエントゼルトゾルダートを包み、そして、溢れていく。

「これは、ベルリンの壁……。暖炉の谷と同じだ……」

汪の思いが声となった。驚きのあまり息を呑むことも、できる。体の制御が戻ってきている。

「カ、カスパル、フィー、離れてくれ！ 私は敵だ！」

ようやく言えたそのときには、カスパル機はもはや、グングニルに取り付いて引き剥がそうとしていた。ひとときわ輝きの強い、太陽のような光のつぶてがグングニルを取り巻き、それを掴んだエントゼルトゾルダートをも飲み込んでいく。

『汪大尉……。これは、この光は……。ハ、ハハハ！ 俺も行けるのか！ ヴォルフやヴァル

ターが行ったように、新天地に……』

うわ言のように呟くカスパルの声が、ふっと、聞こえなくなる。同時に、ヴィオレットヴィカールの機体も傾いた。グングニルを引っ張っていたエントゼルトゾルダートが忽然と消えたのだと、汪はわかった。そして。

<留守を任せる>

江藤の残した最後の思念が、スイッチだった。

あたりを包んでいた光や霧が、急速に散っていく。

ノイエトターは健在だった。龍に取り囲まれる前に逃げようと、汪は呼びかけたかったが、それは叶わなかった。ヴィオレットヴィカールが主要な電源を使い果たし、モニタや BFGのみならず、通信機すら停止してしまった。汪は骨抜きになった機体が崩れ落ちる事態を察し、衝撃に対して身構えようと思ったものの、力がうまく入らない。機体と同様に制御を失った体は、投射されたボールのように複数回の衝突を経て、やがて落ちるべきところへ落ち着いた。

それから何分が過ぎたか。

ノイエトターは飛び去った。機体越しに伝わる、マスティレクタの金切り音がそれを教えてくれた。他にも来る者と去る者の気配。

啓示軍はクレムリン周辺から撤退したのだ。もしかすると、もうモスクワそのものを捨てたかもしれない。

啓示軍の優秀なプロテクタは汪が宿る肉体をしっかりと守ったが、いまだよく動けなかった。声は出るし、眼球も動かせるが、指や手足が満足に動かせない。だから手動でハッチを開放するためのハンドルも握れず、そもそも誤作動防止のパネルを外すことも、そこへ手が届くよう巨躯をよじることままたまならなかった。

どうしてそうなったのか、見当はついていない。自分のほんとうの肉体がオルロフの中に塗り込められており、この体が仮初のものという現実を汪自身が認知した今、以前のようにオルロフにごまかされ続けることはできなくなったのだ。

考えれば考えるほど、体を動かすことが難しくなる。視野が琥珀色の世界と重なって、ぼやけて見える。肉体からの視覚情報が混信しているのだろう。そして、オルロフに埋まった体を動かさないという認知が、その制約を受けないはずの江藤の肉体に対しても重なってしまっている。無意識に対する侵蝕に、汪の意識は抗し得ない。

「私は、汪凱威……。戦略軍特別運用調整官の、出世頭だ……」

己だけは失うまい。汪は声を絞り出すことで、意識を保つ。仮にその声がオルロフのもたらす幻聴のような現象だとしても、それが外界からの干渉で生じている限り、誰か他に聞く者があるかもしれない。エトガルが意識を取り戻してくれるならそれもいい。

何も起きず、さらに何分か過ぎた。何時間だったかもしれない。汪にはもはや区別がつかなくなった。

装甲の上に何者かが取り付く気配があり、やがて外部からハッチがこじ開けられた。光が差し込む。暗がりに慣れた目がだんだんと視力を取り戻すと、そこには霧の晴れた青空が広がっていた。

生きている。たとえ肉体が異なろうとも、そう感じられることに、汪は感動を覚えた。

そこへ人の上半身が割って入った。逆光でも、きれいに剃り上げた頭がよくわかる。汪はその名をしっかりと思い出すことができた。

「生存者二名！ 意識がないぞ。衛生兵を運んで来い！」

カネジュ・イルベチェフは、背後に向かってそう叫び、体の良い人払いが完了すると、汪に顔を寄せてから囁いた。

「江藤少佐、ここは私にお任せを。悪いようには致しません」

他人の名前で呼ばれながらも、汪は眉ひとつ動かさず——動かせず——ただ鷹揚に頷いてみせた。

——続く——